貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第64集

貝塚市遺跡群発掘調査概要25

2003. 3. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は大阪府の南部、泉州地域にあって西に大阪湾、東に和泉葛城山を望む風光明媚な地であります。

先人によって育まれた文化遺産は埋蔵文化財として地中に残されています。しかし今日の急速な開発により埋蔵文化財は失われつつあります。こうした先人の生活の痕跡を記録することにより、その歴史を明らかにする一方で、文化財の保護・活用を図り、文化遺産を未来へ引き継いでいく必要があります。本市においては、文化財の調査・研究、保存をおこない、文化財行政の充実につとめています。

平成14年度中に実施いたしました緊急発掘調査の結果を報告いたします。市域の歴史、文化を知るうえで欠かせない成果を得ることができました。

発掘調査ならびに本書の作成にあたり、多大なご指導、ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。今後とも本市埋蔵文化財保護行政に対する一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成15年3月31日

貝塚市教育委員会

教育長　山本　太三郎

例　　言

1．本書は貝塚市教育委員会が平成14年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告である。
なお、遺物整理の都合から平成13年度調査についても一部掲載している。

2．発掘調査は平成14年４月１日より実施し、平成15年３月31日に終了した。
調査担当者は以下のとおりである。
平成13年度調査　　三浦　基、上野裕子
平成14年度調査　　三浦　基、上野裕子、木嶋崇晴

3．調査にあたっては、関係各位より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

4．本書の執筆は文末に示したとおり各調査担当者が行い、編集は木嶋が行った。

5．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．図６～17・18・20～22の調査図面については、調査地位置図は縮尺１／5000、方位は座標北を上に統一している。また、調査区位置図の方位は磁北を示す。

2．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。

3．本書の土色表示は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』1990年度版を用いた。

目　　次

はじめに
例　　言、凡　　例
目　　次（本文目次、挿図目次、図版目次、表目次）

第１章　平成14年発掘調査の概要 …… 1
第２章　調査結果 …… 7
　1．脇浜遺跡　2001－67区、2002－32区 …… 7
　2．沢城跡　2002－６区、2002－20区 …… 8
　3．石才遺跡　2002－24区 …… 10
　4．地蔵堂遺跡　2002－１区、2002－27区 …… 11
　5．清児遺跡　2002－７区 …… 12
　6．名越遺跡　2001－65区 …… 13
　7．三ツ松北垣外遺跡　2002－19区 …… 14
　8．木積遺跡　2002－31区 …… 15
　9．木積観音寺跡　2001－62区 …… 16
　10．新井ノ池遺跡　2002－47区 …… 17
　11．半田遺跡　2002－49区 …… 17
　12．加治・神前・畠中遺跡 …… 19
　　2001－56区、2001－66区、2002－２区、2002－15区
　　2002－16区、2002－17区
　13．小瀬五所山遺跡　2002－32区 …… 25
　14．地蔵堂丸山古墳　2002－41区 …… 29

挿図目次

図1　貝塚市遺跡分布図
図2　調査地位置図
図3　調査地位置図
図4　調査地位置図
図5　調査地位置図
図6　2001－67区、2002－32区
図7　2002－6区、2002－20区
図8　2002－24区
図9　2002－1区、2002－27区
図10　2002－7区
図11　2001－65区
図12　2002－19区
図13　2002－31区
図14　2001－62区
図15　2002－47区、2002－49区
図16　2002－49区　出土遺物
図17　2001－56区、2001－66区、2002－2区
図18　2002－15区、2002－16区
図19　2002－17区　出土遺物
図20　2002－17区
図21　2002－34区
図22　地蔵堂古墳群位置図
図23　調査区位置図、第1区・第2区断面図
図24　第3区断面図　埴輪列・葺石検出状況
図25　出土埴輪2・3

図版目次

図版1　新井ノ池遺跡（2002－47区）
半田遺跡（2002－49区）
1．2002－47区　調査区1　SD－2、SD－3（南西より）
2．2002－49区　調査区2　SD－2（北より）
図版2　加治・神前・畠中遺跡（2002－17区）
1．2002－17区　調査区1　遺構完掘状況（北東より）
2．2002－17区　調査区2　遺構完掘状況（北東より）
図版3　小瀬五所山遺跡（2002－34区）
1．2002－34区　SD－204（北東より）
2．2002－34区　SD－204（北西より）
図版4　小瀬五所山遺跡（2002－34区）
1．2002－34区　建物A柱穴（Pit－203・207・209・210）（北東より）
2．2002－34区　建物A柱穴（Pit－213・214・215・218）（北東より）
図版5　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）
1．2002－41区　第1区検出状況（北より）
2．2002－41区　第1区断面　（南西より）
図版6　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）
1．2002－41区　第2区検出状況（南より）
2．2002－41区　第2区断面　（南西より）
図版7　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）
1．2002－41区　第3区　近世以降の石群検出状況（南より）
2．2002－41区　第3区　近世以降の石群検出状況（北より）
図版8　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）
1．2002－41区　第3区検出状況（北より）
2．2002－41区　第3区検出状況（南より）
図版9　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）
1．2002－41区　第3区　埴輪列検出状況（南より）
2．2002－41区　第3区　埴輪列検出状況（南より）
図版10　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）
1．2002－41区　第3区葺石検出状況（北より）
2．2002－41区　第3区断面　（南東より）

表目次

表1　平成14年国庫補助事業一覧（平成14年1月～12月）
表2　2002－34区　遺構一覧表

第１章　平成14年発掘調査の概要

平成14年は埋蔵文化財発掘届出及び通知の総件数は214件、遺跡外試掘調査依頼は10件である。平成13年の届出件数と比較すると平成14年の届出件数はやや減少している。

遺跡別にみると、加治・神前・畠中遺跡における届出件数は32件と他の遺跡と比して最も多く、個人住宅の他、宅地造成・店舗に関わる開発も多い。逆に海浜部の貝塚寺内町遺跡における届出件数は９件であり、前年比16件と住宅の建て替え等の開発が減少傾向にあるといえる。

届出・通知に関わる対応について、確認調査は62件、立会調査は25件である。国庫補助対象となる個人住宅の建設に伴う調査は12件である。

遺跡発見については、沢西遺跡を遺跡の範囲拡張、麻生中薬師堂遺跡は新規の遺跡発見として追加した。

	遺跡名	調査番号	遺跡略号	開発地
	（平成13年度）			
1	加治・神前・畠中遺跡	2001－56	ＫＫＨ	加神2－228－1、228－3～6
2	木積観音寺跡	2001－62	ＫＫＤ	木積1963－16
3	名越遺跡	2001－65	ＮＧ	名越192－1
4	加治・神前・畠中遺跡	2001－66	ＫＫＨ	加神2－279－12
5	脇浜遺跡	2001－67	ＷＨ	脇浜2-453-2、453-7、453-8、453-11、453-12
	（平成14年度）			
6	地蔵堂遺跡	2002－１	ＧＺＺ	地蔵堂225
7	加治・神前・畠中遺跡	2002－２	ＫＫＨ	加神1－100の一部、99－1の一部
8	沢城跡	2002－６	ＳＪ	沢1281－3の一部
9	清児遺跡	2002－７	ＳＧ	麻生中750－4、597－2
10	加治・神前・畠中遺跡	2002－15	ＫＫＨ	石才150－1の一部
11	加治・神前・畠中遺跡	2002－16	ＫＫＨ	畠中1－204－8の一部、204－10
12	加治・神前・畠中遺跡	2002－17	ＫＫＨ	加神1－140－1
13	三ツ松北垣外遺跡	2002－19	ＭＫ	三ツ松1023－6、1047－1の一部
14	沢城跡	2002－20	ＳＪ	沢1273－1外５筆
15	石才遺跡	2002－24	ＩＳ	鳥羽94－7
16	地蔵堂遺跡	2002－27	ＧＺＺ	地蔵堂221－1
17	木積遺跡	2002－31	ＫＴ	木積2135－3の一部
18	脇浜遺跡	2002－32	ＷＨ	脇浜2－3－9の一部、2－3－7の一部
19	小瀬五所山遺跡	2002－34	ＫＧＹ	小瀬371-5、-6、376～378、380～383、久保162-4
20	地蔵堂丸山古墳	2002－41	ＧＭＹ	地蔵堂198
21	新井ノ池遺跡	2002－47	ＮＩ	麻生中881－4
22	半田遺跡	2002－49	ＨＤ	麻生中947

表１　平成14年国庫補助事業一覧（平成14年１月～12月）

1.沢新出遺跡　2.沢海岸遺跡　3.沢遺跡　5.長楽寺跡　7.地蔵堂丸山古墳　8.地蔵堂廃寺　9.下新出遺跡　10.秦廃寺　15.麻生中新池遺跡　16.河池遺跡　17.水間寺遺跡　18.木積観音寺跡　20堀遺跡　21橋本遺跡　22.貝塚寺内町遺跡　23.加治・神前・畠中遺跡　24.明楽寺跡　25.沢共同墓地遺跡　26.沢西出遺跡　27.沢海岸北遺跡　28.沢城跡　29.新井・鳥羽遺跡　30.新井ノ池遺跡　31.半田遺跡　32.麻生中遺跡　34.澱池遺跡　35.積善寺城跡　36.清児遺跡　37.集原池遺跡　38.高井天神廃寺・高井城跡　39.森城跡　40.森Ｂ遺跡　41.森ノ大池遺跡　42.森Ａ遺跡　43.二ツ池遺跡　44.千石堀城跡　45.水間墓地　46.三ケ山城跡　47.片山墓地　48.蛇谷城跡　51.窪田遺跡・窪田廃寺　53.坊城遺跡　54.三ツ松遺跡　55.槍ヶ谷城跡　56.半田遺跡（清児地区）　57.堤遺跡　58.小瀬五所山遺跡　59.石才遺跡　60.王子遺跡　61.土生遺跡　64.海岸寺山遺跡　66.脇浜遺跡　67.今池遺跡　68.三ヶ山遺跡　69. 三ヶ山西遺跡　70.石才南遺跡　71.名越遺跡　72.地蔵堂遺跡　73.名越西遺跡　74.木積遺跡　75.新井・鳥羽北遺跡　78.沢西遺跡　79.王子西遺跡　80.津田遺跡　81.三ヶ山オニ谷遺跡　82.福田遺跡　83.森下代遺跡　84.三ツ松北垣外遺跡　85.薬師池西遺跡　86.麻生中出口遺跡　87.小瀬遺跡　88.堤三宅遺跡　89.沢新開遺跡　90.沢タナジリ遺跡　91.堀新遺跡　92.橋池遺跡　93.麻生中下代遺跡　94.堀秋毛遺跡　95.半田北遺跡　96.沢老ノ塚遺跡　97.東遺跡　98.馬場遺跡　100.鳥の池西遺跡　101.白地谷遺跡　102.津田北遺跡　103.久保遺跡　108.水間二ノ戸遺跡　109.窪田ハマデ遺跡　110.海塚遺跡　111.脇浜川端遺跡　112.馬場笹力遺跡　113.橋本野岸ノ下遺跡　114.麻生中薬師堂遺跡

図１　貝塚市遺跡分布図（部分・貝塚市域のみ）

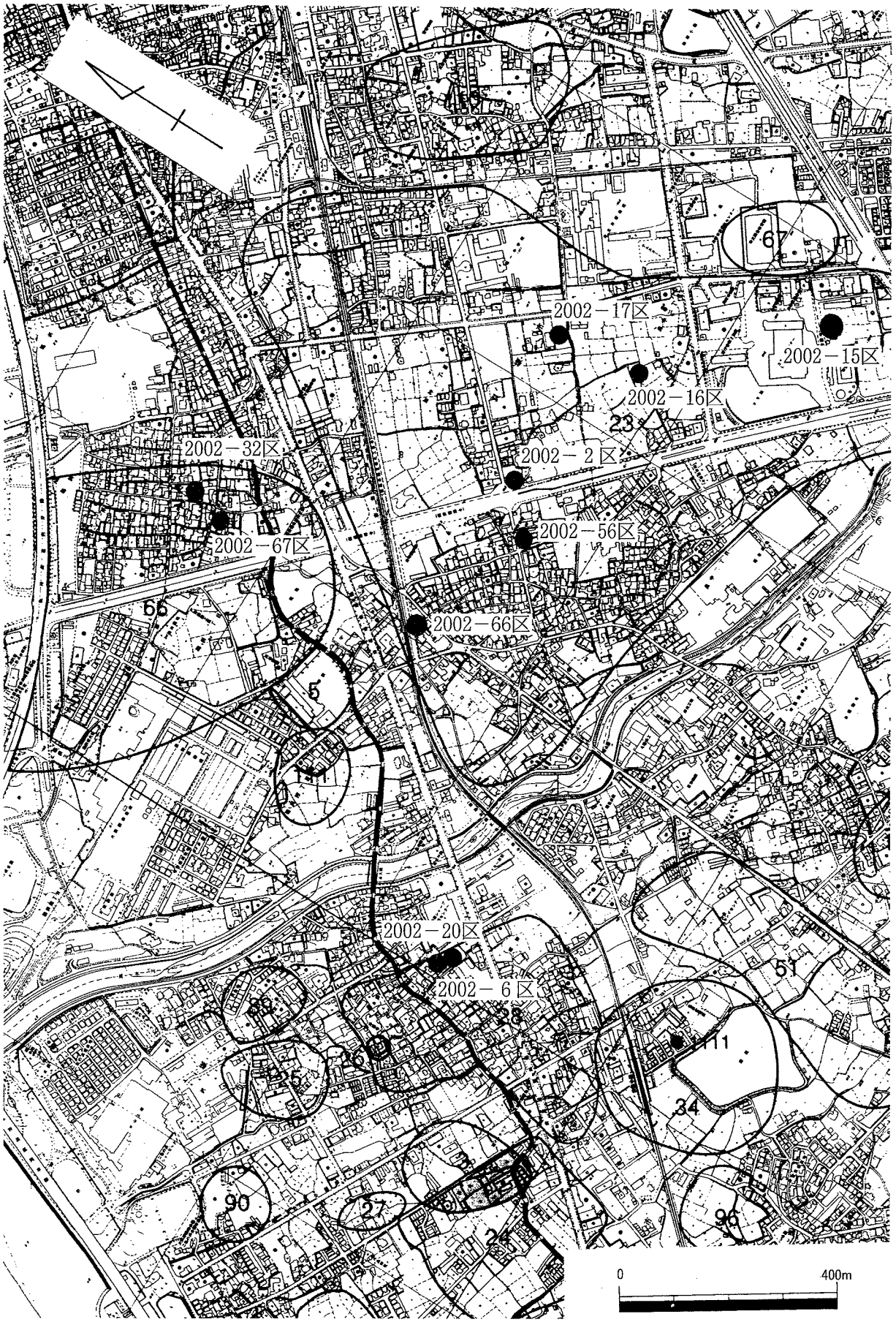

2002－17区
2002－15区
2002－16区
2002－32区
2002－2区
2002－56区
2002－67区
2002－66区
2002－20区
2002－6区
0
400m

図２　調査地位置図

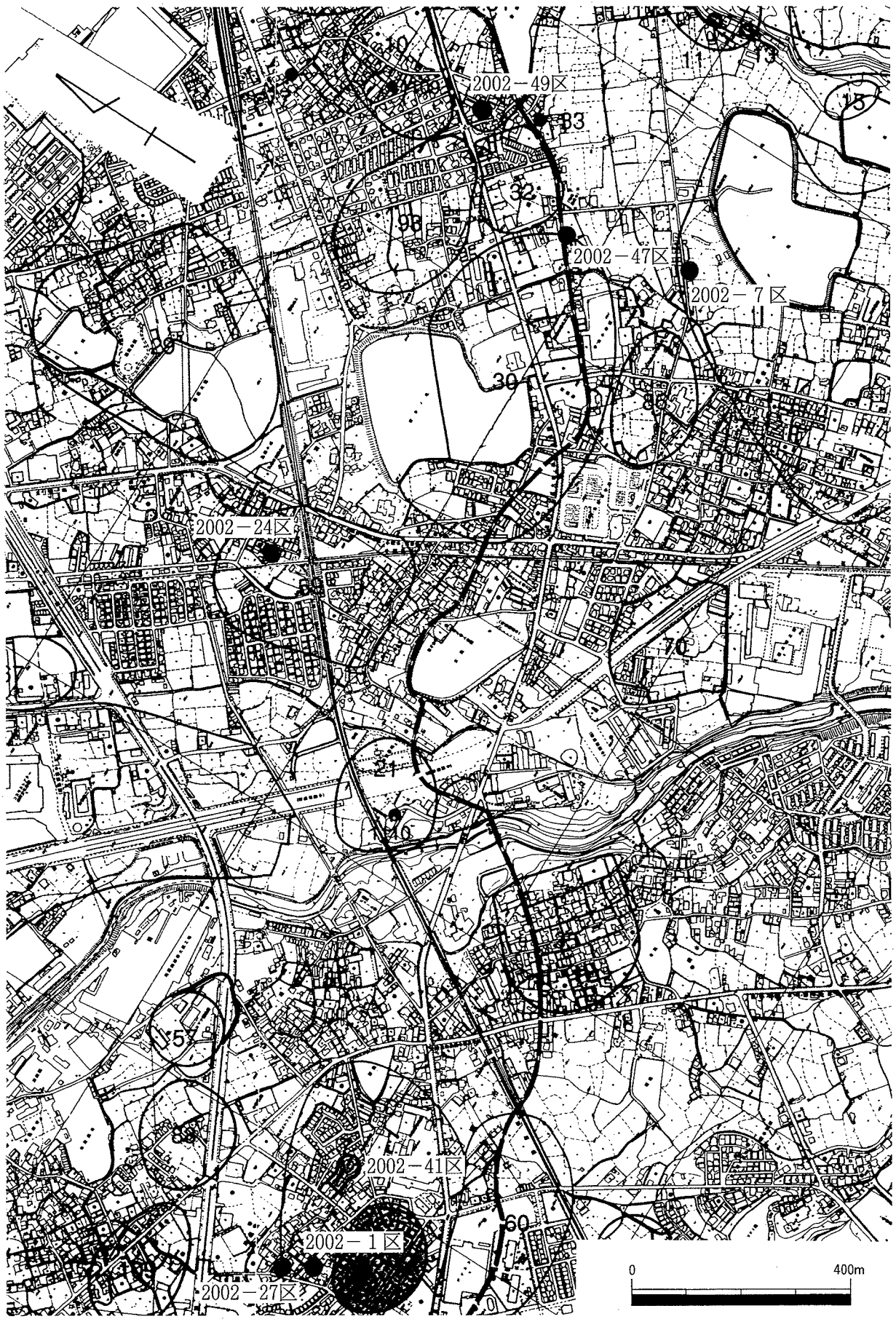
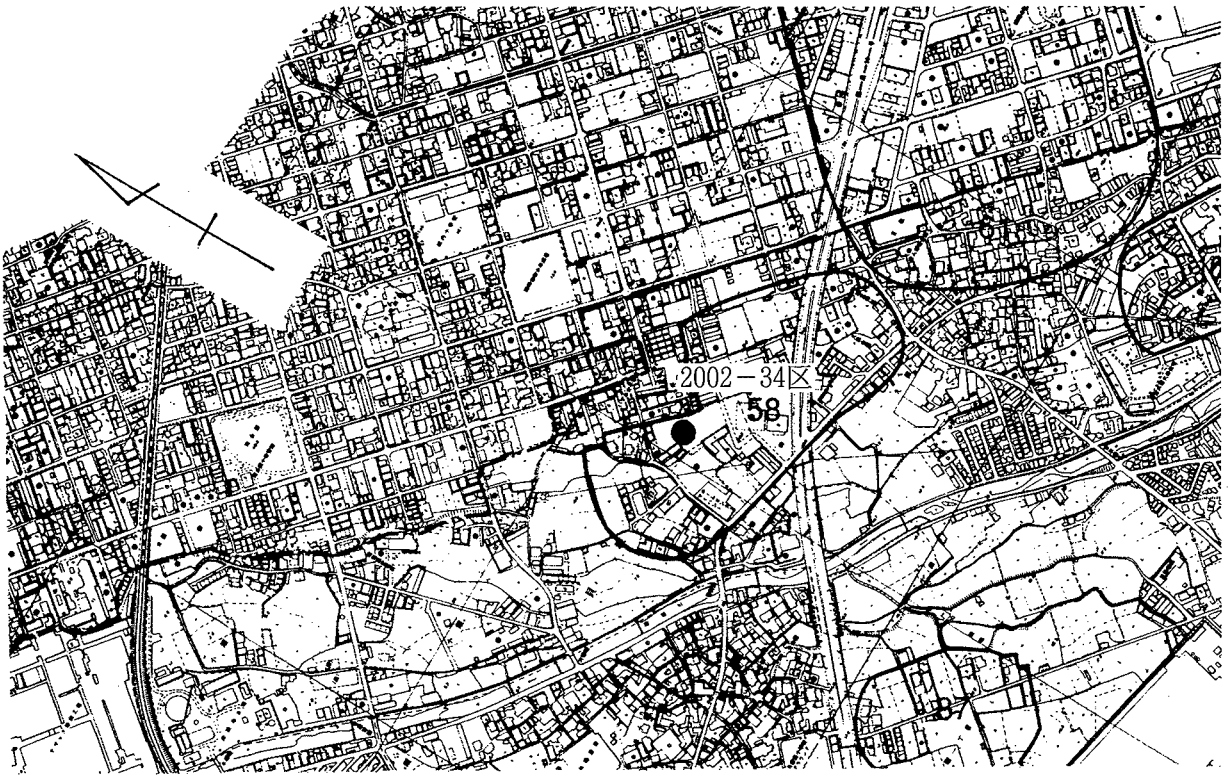

2002－49区
2002－47区
2002－7区
2002－24区
2002－41区
2002－1区
2002－27区
0
400m

図３　調査地位置図

図４　調査地位置図



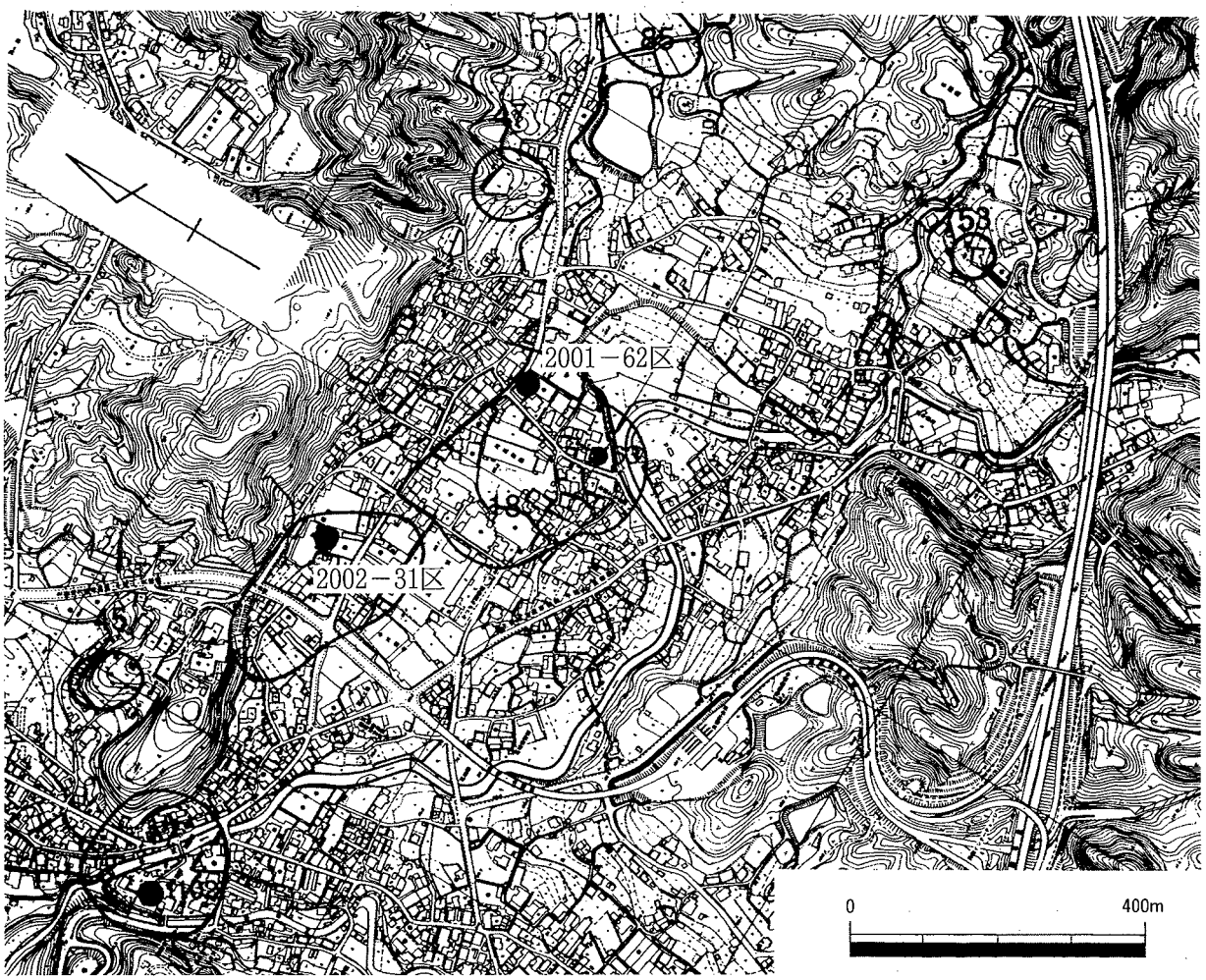


図５　調査地位置図

第2章　調査結果

1．脇浜遺跡

本遺跡は近木川右岸に位置する縄文時代から近世にかけての散布地、生産遺跡である。脇浜遺跡からは多数の漁撈具とともに製塩土器が出土することから、海岸縁辺部という立地条件を活かして、製塩を行っていたと考えられる。

2001－67区の調査　（図6）

本調査は、脇浜2－453－2、453－7、453－8、453－11、453－12において実施した。調査は、駐車場予定部分に0.8m×1.1m（0.88㎡）の調査区を設定して行った。

調査区の層序は、第1層が盛土（層厚0.2m）、第2層は盛土（層厚0.15m）、第3層は耕作土（層厚0.08m）、

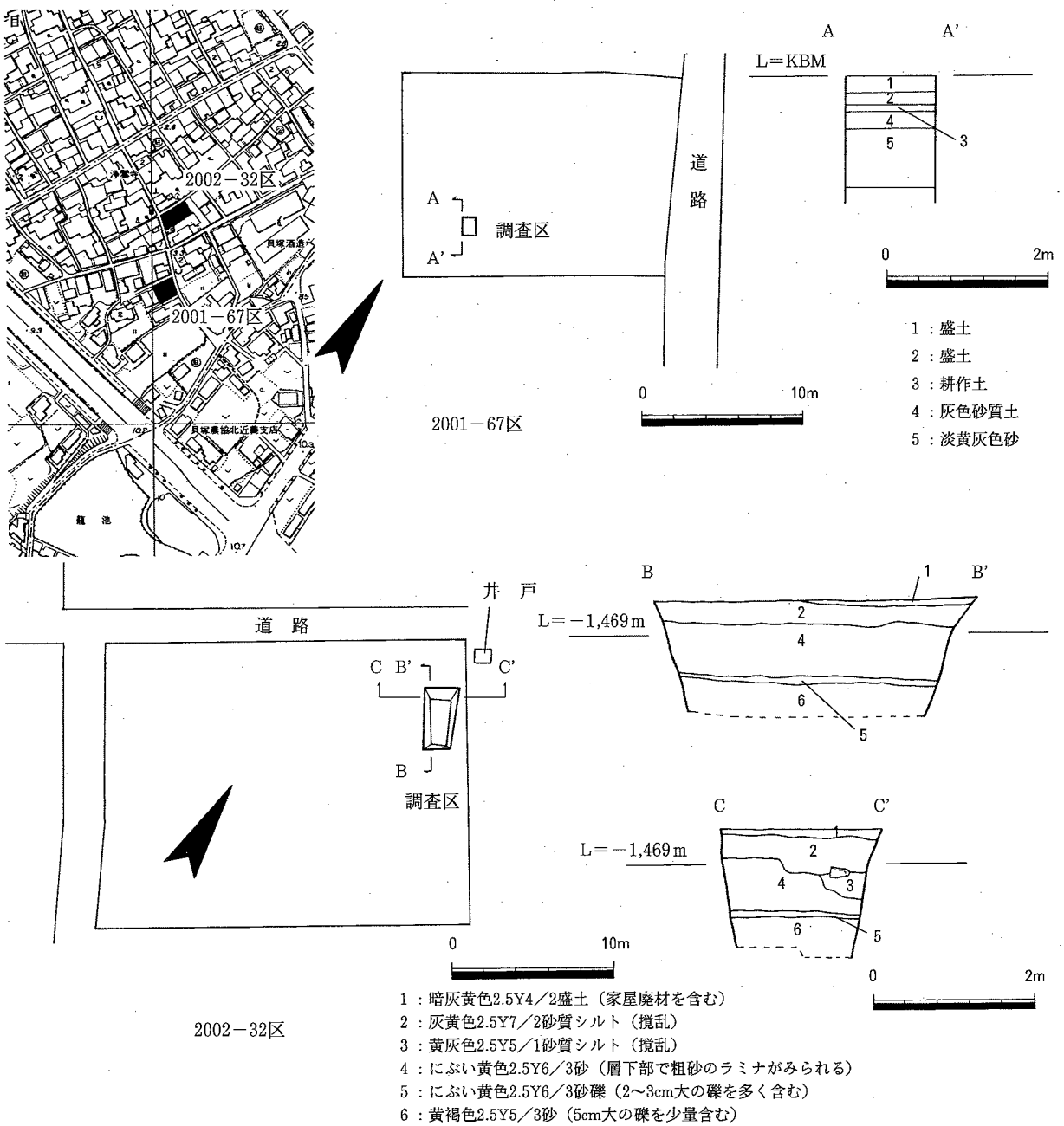


図6　2001－67区、2002－32区

第４層は灰色砂質土（旧耕作土・層厚0.2m）、第５層は淡黄灰色砂（耕作土混じる・層厚0.62m）である。現状地盤から1.35m掘削したが地山は確認できなかった。海岸段丘斜面部に位置しているため、耕作土を運び入れて平坦面とし、段々畑としていることが考えられる。遺構は検出できなかった。遺物は第４層から土師器、瓦器が出土している。開発地には遺物が出土したが２次的なものの可能性が高いと考えられる。

（三浦）

2002－32区の調査　（図６）

本調査は、脇浜2－3－9、2－3－7の各一部において実施した。調査は申請地東部において８㎡の調査区を設定して行った。

調査区の層序は、１層が暗灰黄色盛土（層厚0.1m）、２層は灰黄色砂質シルト（層厚0.3～0.4m）、３層は黄灰色砂質シルト（層厚0.3m）、４層はにぶい黄色砂（層厚0.6m）、５層はにぶい黄色砂礫（層厚0.1m）、６層は黄褐色砂（層厚0.5m以上）である。１層では瓦や木材等の家屋廃材が多量に含まれる。２・３層は撹乱であり、２層より20cm大の石や石臼が出土している。４～６層は砂堆積層であり、４層の下部では粗砂のラミナがみられた。５層では２～３cm大の礫を多く含み、６層は５cm大の礫を少量含んでいる。４～６層の砂堆積層からは遺物は出土していない。６層以下については、湧水により砂層が崩れるおそれがあるため、これ以上の調査は断念した。

調査の結果、申請地は砂堆積層上に立地しており、その上層において近・現代の撹乱・盛土が存在し、石臼等が出土しているが、遺物包含層を確認することはできなかった。（木嶋）

２．沢城跡

本遺跡は近木川左岸の中位段丘上、標高８～11mに位置する。中世・戦国時代の集落跡・城跡と推定されている。沢城は紀州根来勢により畠中城・積善寺城とともに近木川流域に築かれた城である。沢城跡では中世の掘立柱建物跡、耕地跡、溝等を検出している。

2002－6区の調査　（図７）

本調査は、沢1281－3の一部において実施した。調査地の小字名は「ハント垣内」である。調査は申請地北部において1.5m×５m（7.5㎡）の調査区を設定して行った。

調査区の層序は、第１層が現耕土、第２層は褐灰色砂質土、第３層は浅黄色粘質シルト～灰白色粘質シルト（地山）である。

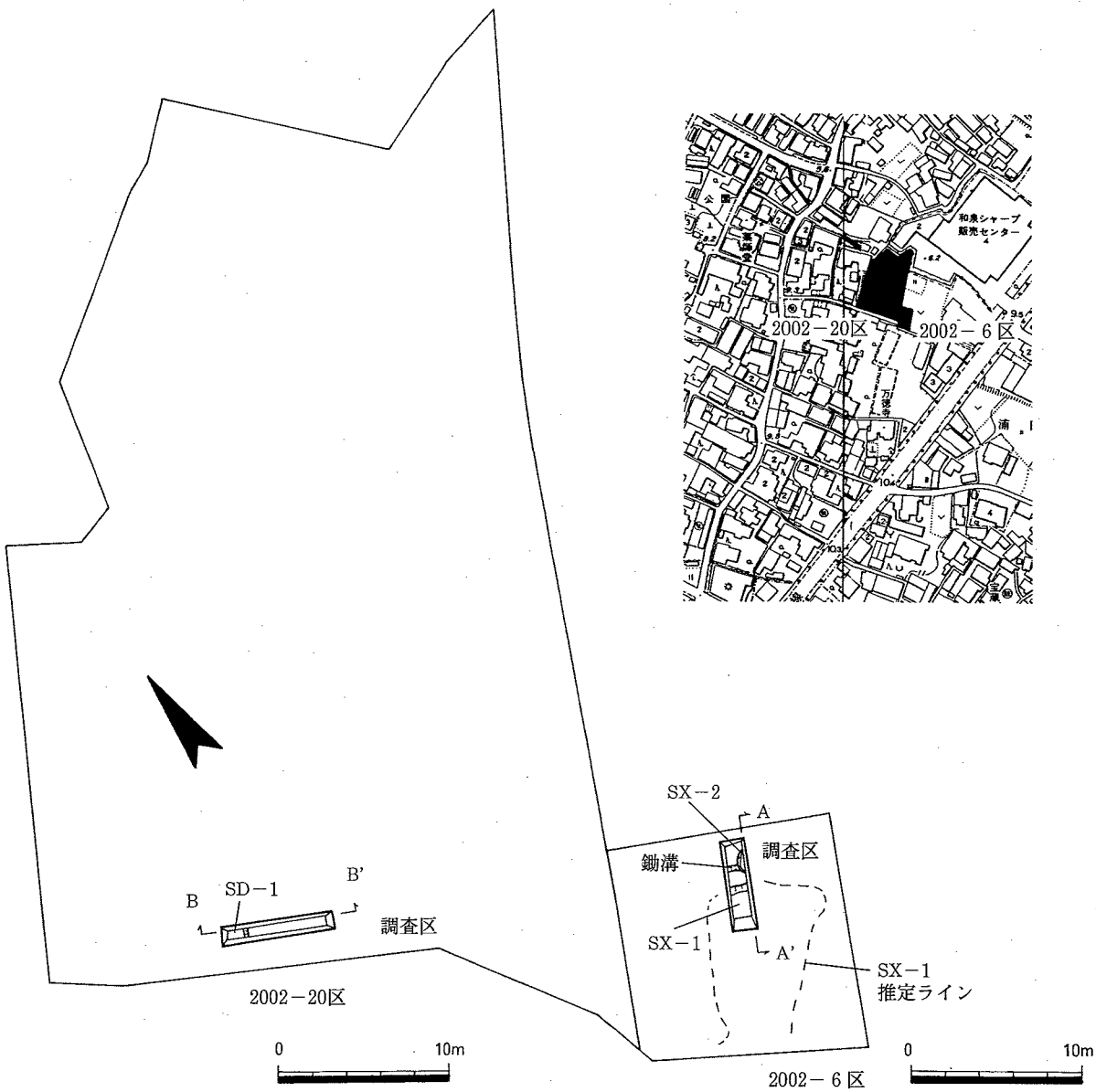
地山上面において鋤溝、落込み遺構（SX－１）、土坑（SX－２）を検出した。SX－２の埋土は褐灰色砂質土であり、第２層よりも砂粒が粗い。SX－１は、検出長2.5m以上、深さ0.5mである。埋土は上層より褐灰色砂質土、黄灰色地山ブロック混じり砂質土（３～５cm大の川原石を多数含む）、黄灰色地山ブロック混じり砂質土である。本遺構５・６層は川原石や地山ブロックが多数混在していることから人為的に埋め戻されたと考えられる。また遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質甕等が出土しており、埋没時期は14世紀頃と考えられる。

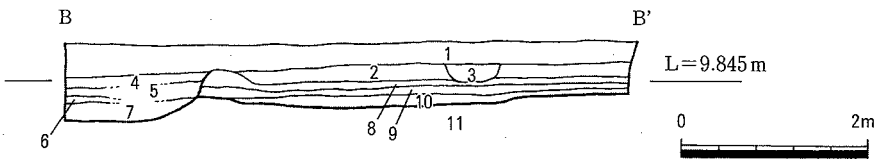
調査区北部において鋤溝を検出したことから、中世の耕地跡であることが判明した。調査区の堆積状況からSX－１埋没後に耕地化されたものと考えられる。SX－１については後日、立会調査を行い、申請建物の基礎部断面の観察により約５～８mの範囲で遺構が広がることを確認した。しかし断片的な調査であったため、その性格については不明である。（木嶋）

2002－20区の調査　（図７）

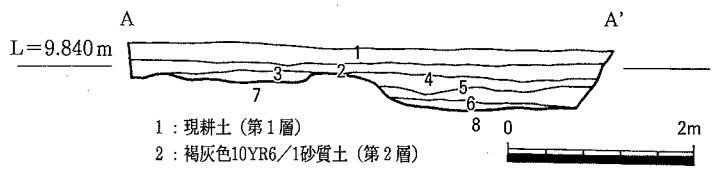
本調査は、沢1273－1外５筆において実施した。調査地の小字名は「垣外」、「ハント垣内」、「半戸垣外」である。申請地の増築部分において調査区（６㎡）を設定して行った。

調査区の層序は、第１層が盛土（１層・層厚0.25m）、第２層は浅黄色盛土（２層・層厚0.15m）、第３層は灰





1：盛土（第1層）
2：浅黄色7.5Y7／3盛土（第2層）
3：撹乱
4：にぶい黄橙色10YR6／3砂質土（SD－1）
5：褐灰色10YR6／1粗砂混じり砂質土（SD－1）
6：灰黄褐色10YR5／2土混じり褐灰色10YR6／1砂質土（SD－1）
7：灰色5Y5／1礫混じり粗砂（SD－1）
8：灰色7.5Y5／1砂質土（第3層・旧耕土）
9：暗灰黄色2.5Y5／2土混じり黄灰色2.5Y5／1粘質土（第4層）
10：黄灰色2.5Y5／1粗砂混じり粘質土（第5層）
11：にぶい黄色2.5Y6／3砂礫混じり灰白色2.5Y7／1砂質シルト（第6層・地山）



1：現耕土（第1層）
2：褐灰色10YR6／1砂質土（第2層）
3：褐灰色10YR6／1砂質土（SX－2）
4：褐灰色10YR5／1砂質土（SX－1）
5：黄灰色2.5Y5／1地山ブロック混じり砂質土（川原石を多数含む・SX－1）
6：黄灰色2.5Y6／1地山ブロック混じり砂質土（SX－1）
7：浅黄色5Y7／4粘質シルト～灰白色5Y8／2粘質シルト（第3層・地山）

図7　2002－6区、2002－20区

色砂質土（８層・層厚0.08m）、第４層は暗灰黄色土混じり黄灰色粘質土（９層・層厚0.1m）、第５層は黄灰色粗砂混じり粘質土（10層・層厚0.05～0.1m）、第６層はにぶい黄色砂礫混じり灰白色砂質シルト（11層・地山）である。SD－１は、調査区西端において検出した溝である。検出幅1.5m以上、深さ0.5mである。埋土は４層がにぶい黄橙色砂質土、５層は褐灰色粗砂混じり砂質土、６層は灰黄褐色土混じり褐灰色砂質土、７層は灰色礫混じり粗砂である。５・７層からは陶磁器、瓦が出土している。

工事主体者によると、かつて本申請地の周辺は小区画の耕地が広がり、それに伴う水路が存在していたようである。水路は本申請地を縦断し、さらに北方向へ延長されていたが、大正期に埋め戻したという。SD－１から出土した陶磁器はいずれも近代のものであり、工事主体者の証言を裏付けるものである。

本申請地において計２層の遺物包含層を確認した。遺物は染付碗、唐津焼碗の陶磁器片が出土しているため、これらの層は近世耕土層と考えられる。地山上面において遺構検出を行ったが、土地の削平等により遺構を確認することはできなかった。東隣地での調査（2002－６区）にて検出した中世の遺物包含層や落込み遺構は、本申請地では確認することができなかった。中世の遺物包含層は削平された可能性があり、落込み遺構は前回調査で確認した規模を超えないものと考えられる。（木嶋）

３．石才遺跡

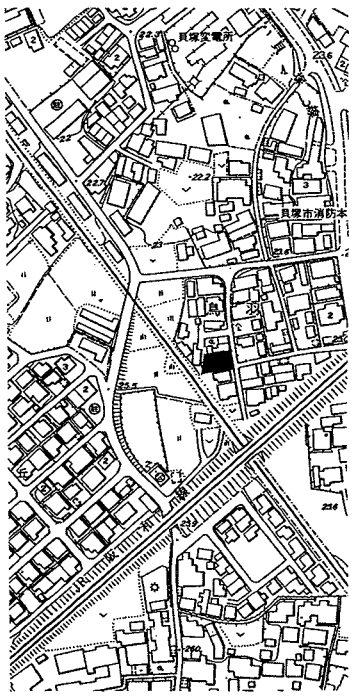
本遺跡は近木川の右岸の中位段丘上、標高21～23mに位置する。本遺跡は周知の遺跡として、縄文時代、平安時代～中世にかけての遺物散布地である。1981年度の調査では中世の溝、柵列跡、平安時代の土坑を検出している。

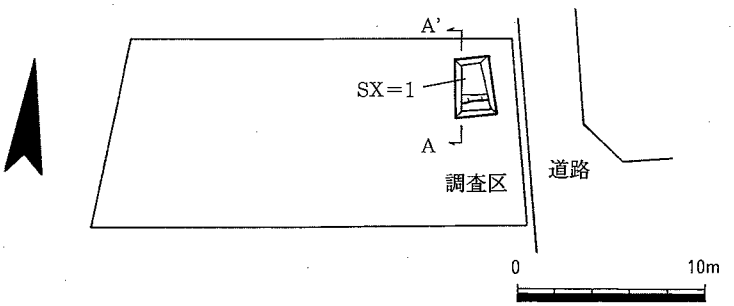
2002－24区の調査　（図８）

本調査は、鳥羽94－7において実施した。調査は申請地の浄化槽部分において２m×３m（６㎡）の調査区を設定して行った。

調査区の層序は、１層が表土、２層はオリーブ黒色盛土、３層はオリーブ黄色盛土（礫含む）、４層は黄灰色礫混じり砂質土、５層は灰黄色礫混じり砂質土、６層は灰色礫砂混じり粘質土、７層は灰色礫混じり粘質シルト（３cm大の礫含む）、８層は灰オリーブ色礫混じり粘質シルト、９層は黄褐色粘質シルト（地山）である。

本調査区からは北西方向へ大きく落込む、SX－１を検出した。SX－１の埋土である６～８層は３cm大の礫





1：表土
2：オリーブ黒色7.5Y3／1盛土
3：オリーブ黄色5Y6／4盛土
4：黄灰色2.5Y5／1礫混じり砂質土
5：灰黄色2.5Y6／2礫混じり砂質土
6：灰色5Y5／1礫砂混じり粘質土（SX－１）
7：灰色7.5Y5／1礫混じり粘質シルト（SX－１）
8：灰オリーブ色7.5Y6／2礫混じり粘質シルト（SX－１）
9：黄褐色2.5Y5／3粘質シルト（地山）

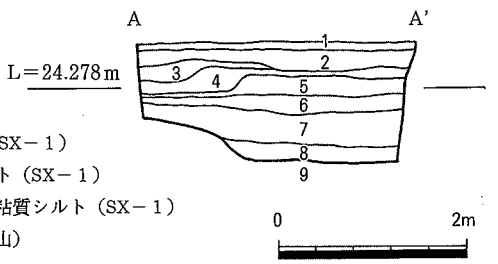


図８　2002－24区

を中心とする粘質シルト層であり、7層より瓦や染付碗、擂鉢の陶磁器が出土している。これらの遺物は磨滅の痕跡がみられないことから、流水によって運ばれたものではないと考えられる。したがって、埋土を構成する礫は流水によって供給されたものではなく、人為的に埋め戻されたものと推測される。本遺構の深さは0.7mであり、埋土は粘質シルト層であることから滞水状態であったと考えられる。規模は調査区外に広がるため不明である。本遺構の性格については、おそらく貯水施設であろうか。出土遺物により近世に埋没したものと判断される。

調査の結果、近世に埋没したとみられる落込み遺構（SX－1）を検出したが、規模、性格について明らかにすることはできなかった。また4層からは近代の陶磁器がまとまって出土している。出土遺物は皿、小皿、碗等の食器類、擂鉢、瓦である。食器類は重なった状態で出土していることから一括して廃棄されたものと考えられる。（木嶋）

4．地蔵堂遺跡

本遺跡は近木川左岸の中位段丘上、標高22～23mに位置し、その範囲は前方後円墳である地蔵堂丸山古墳、平安時代の寺院跡である地蔵堂廃寺を包括する。本遺跡では中・近世の耕地跡や祭祀的行為が行なわれたと考えられる中世の素掘り井戸等を検出している。また南接する王子遺跡は掘立柱建物跡や溝等の鎌倉時代の集落跡を検出している。

2002－1区の調査　（図9）

本調査は、地蔵堂225において実施した。調査は申請地内東側において1.5m×8m（12㎡）の調査区を設定して行った。

調査区の層序は、第1層が盛土（層厚0.2m）、第2層は灰オリーブ色シルト（層厚0.1m）、第3層はにぶい黄色地山ブロック混じり黄灰色シルト（層厚0.15m）、第4層は浅黄色シルト～砂質土（地山）である。

第1・2層はともに近・現代の盛土である。調査区東壁面において土坑（SK－1）を検出した。土坑の埋土は灰黄色シルトに地山ブロックが混入し、土質に締まりがないため、比較的新しい時期のものと思われる。第3層は細かい炭化物が混入する層であり、数点の瓦片が出土している。瓦は破片のため時期を特定することはできないが、堆積層序の観察によりおそらく近世後半以降と考えられる。

本申請地は平安時代に成立した正福寺の北西にあたり、寺院関連、集落跡の遺構や遺物、特に瓦の出土が期待される地域である。今回の調査では、土地の削平を受けており、遺構や遺物包含層は検出できなかった。（木嶋）

2002－27区の調査　（図9）

本調査は、地蔵堂221－1において実施した。調査は申請地内において2ヵ所の調査区（調査区1：5.7m×1.6m、調査区2：2.3m×1.0m、計11.42㎡）を設定して行った。

調査区1の層序は、第1層が表土（層厚0.05～0.1m）、第2層はにぶい黄橙色粘質土（層厚0.1～0.15m）、第3層は黄灰色土（層厚0.1m）、第4層はにぶい黄色粘質土（層厚0.08m）、第5層は明黄褐色粘質シルト～粘土（地山）である。

第3層は旧耕土、第2・4層は整地層であり、層中より遺物は出土していない。地山上面で遺構検出を行ない、素掘り井戸を検出した。井戸の規模は直径0.9m、深さ2.5m以上である。埋土は上層よりにぶい黄色粘質土（6層：層厚0.5m）、にぶい黄橙色シルト混じり粘質土（7層：層厚0.75m）、にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト（8層：層厚0.45m）、にぶい黄褐色砂混じり粘質土（9層：0.9m以上）である。井戸の埋土7層から瓦1点、陶磁器2点が出土している。

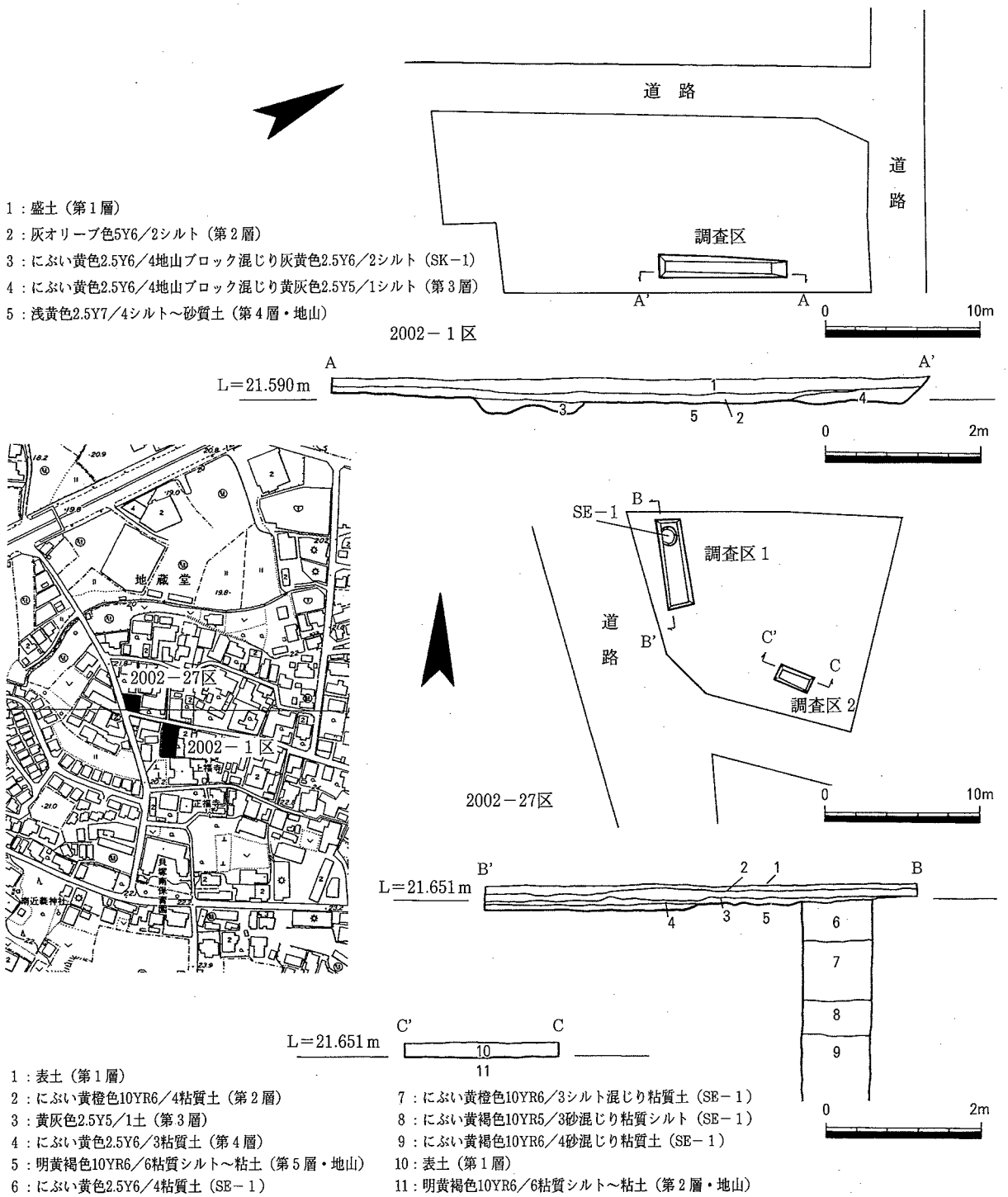
調査区2の層序は、第1層が表土（層厚0.2m）、第2層は明黄褐色粘質シルト～粘土（調査区1の第5層と対応する）である。遺構・遺物は確認することはできなかった。

調査の結果、申請地は土地の削平を受けており、遺物包含層を確認することはできなかった。地山上面において素掘り井戸を検出した。本調査地の南西側で平成5年度の調査において中世の井戸を検出している。中世の井

戸は素掘りであり、径1.3m、深さ約４ｍを測る。井戸からは瓦器椀、土師器小皿、羽釜、瓦のほか桃の種子が出土している。今回検出した井戸は底部を確認していないため、井戸設置時期等については不明であるが、井戸の埋没時期は出土遺物より近世以降と考えられる。（木嶋）

５．清児遺跡

本遺跡は近木川右岸の中位段丘上、標高32～38ｍに位置する。近年、遺跡の南西部では宅地化が進む一方、遺跡の北東部では耕地が広がる。これまでの調査より本遺跡やその南東部に位置する名越遺跡では、耕地跡や溝跡等を検出している。



1：盛土（第１層）
2：灰オリーブ色5Y6／2シルト（第２層）
3：にぶい黄色2.5Y6／4地山ブロック混じり灰黄色2.5Y6／2シルト（SK－1）
4：にぶい黄色2.5Y6／4地山ブロック混じり黄灰色2.5Y5／1シルト（第３層）
5：浅黄色2.5Y7／4シルト～砂質土（第４層・地山）

1：表土（第１層）
2：にぶい黄橙色10YR6／4粘質土（第２層）
3：黄灰色2.5Y5／1土（第３層）
4：にぶい黄色2.5Y6／3粘質土（第４層）
5：明黄褐色10YR6／6粘質シルト～粘土（第５層・地山）
6：にぶい黄色2.5Y6／4粘質土（SE－１）
7：にぶい黄橙色10YR6／3シルト混じり粘質土（SE－１）
8：にぶい黄褐色10YR5／3砂混じり粘質シルト（SE－１）
9：にぶい黄褐色10YR6／4砂混じり粘質土（SE－１）
10：表土（第１層）
11：明黄褐色10YR6／6粘質シルト～粘土（第２層・地山）

図９　2002－１区、2002－27区

2002－7区の調査　（図10）

本調査は、麻生中750－4、597－2において実施した。調査は申請地の浄化層部分について調査区（5㎡）を設定して行った。

調査区の層序は、第1層がコンクリート土間（層厚0.1m）、第2層は盛土（層厚0.5m）、第3層は暗灰色粗砂混じり粘質土（層厚0.15m）、第4層は灰オリーブ色粗砂混じり粘質土（層厚0.3m）、第5層は黄灰色粗砂混じり粘土（層厚0.2m）、第6層はにぶい黄色粘土（層厚0.2m）、第7層は褐灰色粗砂混じり粘質土（層厚0.06m）、第8層はにぶい黄色砂（層厚0.2m以上）である。

第8層は砂層堆積であり、湧水が著しく砂層が崩れるおそれがあり、8層以下の確認はできなかったが、河川堆積層の可能性がある。第7層は土壌化層であり、河川埋没後、一時地表面化していたものと考えられる。第7層上・下面で遺構検出を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。第5・6層は多量の粗砂が混入する粘土層であり、流水が度々流れ込んでいたと思われる。第4層は粘土ブロックや小礫が混在しているため、人為的に埋め戻された層と考えられる。第3層は旧耕土であり、土質から近・現代のものであろう。

調査の結果、大池の北西にあたる本申請地は、河川埋没後は湿地であったことが確認され、近代に至り耕地化したと考えられる。

（木嶋）

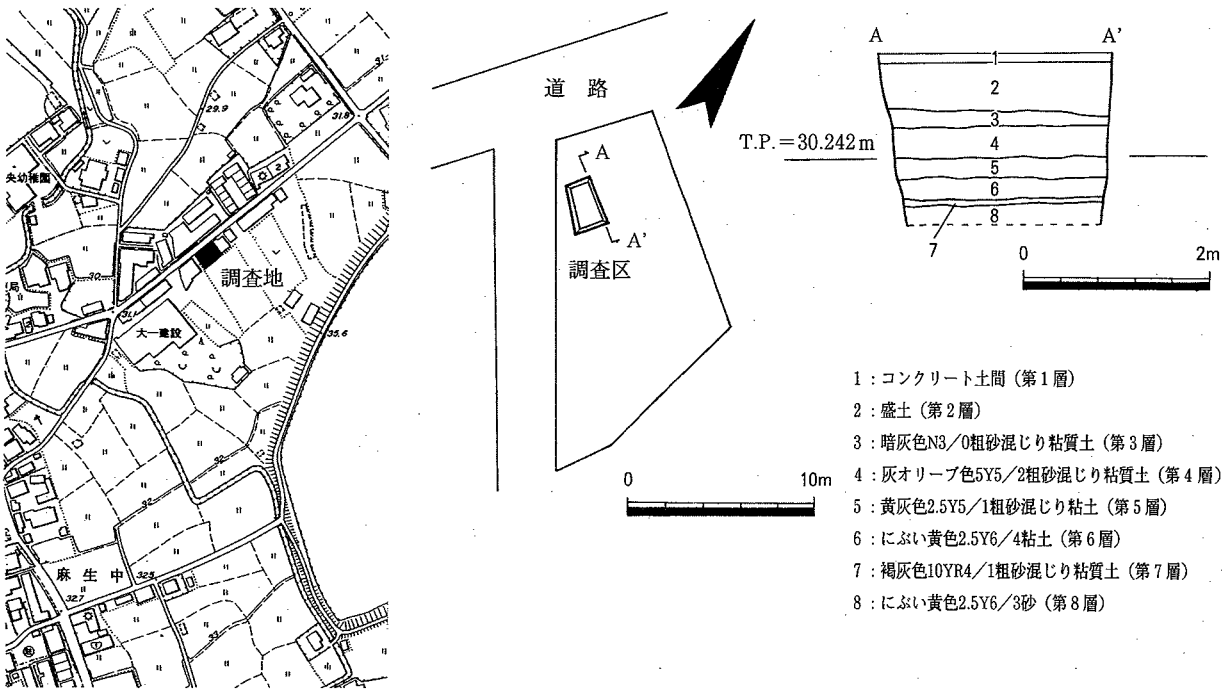


図10　2002－7区

6．名越遺跡

本遺跡は近木川右岸の中位段丘上、標高32～38mに位置する。周知の遺跡として中世の散布地に推定されており、これまでの調査より耕地跡や溝跡等を検出している。本遺跡の西には名越西遺跡が所在し、古墳時代前期の溝を検出したほか、弥生時代中期以降の土器が出土している。

2001－65区の調査　（図11）

本調査は、名越192－1において実施した。調査は申請地内南側に1.5×4.6mの調査区を設定して行った。調査区の堆積層は、第1層が盛土（層厚約0.5m）、第2層は黄灰色砂質土（層厚0.15～0.2m）、第3層は暗青灰色粘質土～シルト（層厚約0.15m）である。地山は青灰色～黄色細砂～中砂で現状地盤より0.8～0.85mで検出した。

地山の細砂～中砂層は湧水層で、流路堆積と考えられる。周辺の調査においても流路堆積を確認しており、一

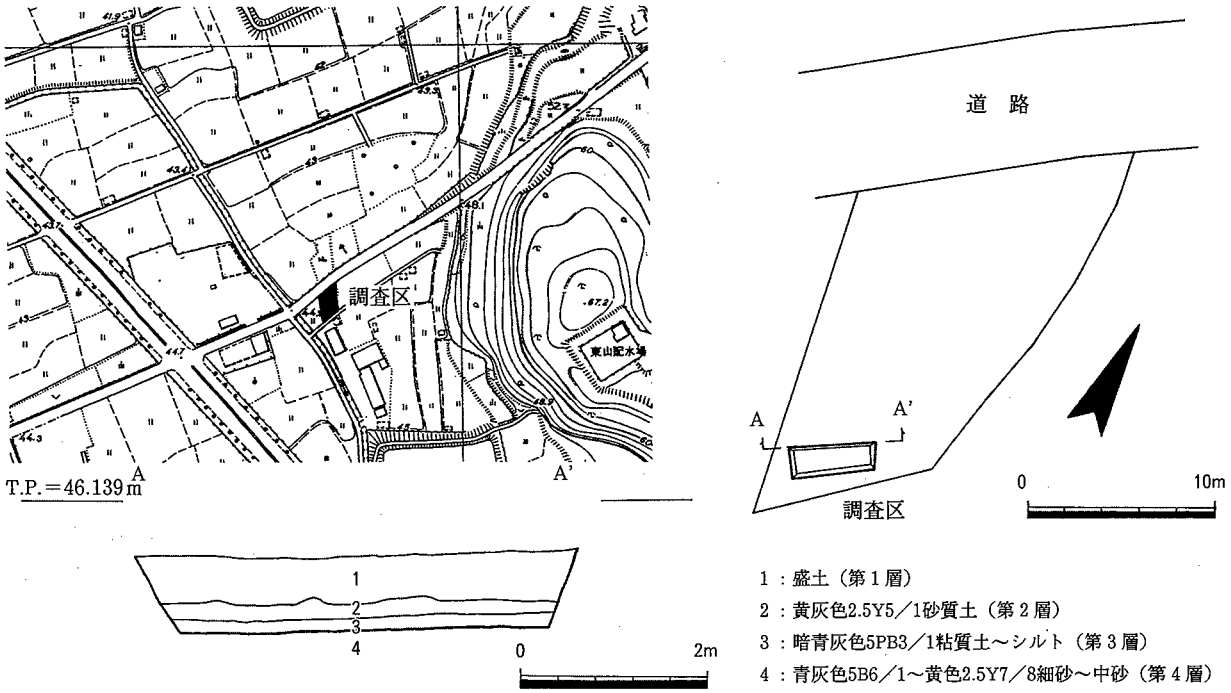


図11　2001－65区

帯に南西から北東にかけて埋没河川があったのだろう。第3層は人為的に堆積したものではなく、流路埋没後の自然堆積層であり、第2層は上面に畦が確認されているため、耕作土である。上面は隣地の耕作土とほぼ同じ高さであり、近代～現代のものと考えられる。

以上のことから、調査地は埋没河川の影響を受けて開発されていなかったが、河川の流れが変わり、安定した土地を得ることができたため、近代から耕作が行われるようになったものと思われる。　（上野）

7．三ツ松北垣外遺跡

本遺跡は、近木川左岸の中位段丘上、標高55～57mに位置する。周知の遺跡として、中世の集落跡と推定される。この三ツ松地域は永寿池をはじめとする大小の灌漑用水が設けられている。近年、本遺跡の南においては宅地化が進んでおり、また南東側に位置する三ヶ山西遺跡からは中世の耕地跡や遺物包含層を確認している。

2002－19区の調査　（図12）

本調査は、三ツ松1023－6、1047－1の一部において実施した。調査は浄化槽部分において調査区（10.8㎡）を設定して行った。

調査区の層序は、1層がにぶい黄褐色盛土（層厚0.05m）、2層は灰色盛土（層厚0.05m）、3層は黄灰色盛土（層厚0.25m）、4層は灰色灰・炭化物混じり土（層厚0.2m）、5層は明黄褐色粘土ブロック（層厚0.1m）、6層は灰黄色砂礫混じり粘質土（層厚0.18m）、7層は暗灰黄色砂礫混じり粘質土（層厚0.2～0.4m）、8層は黄灰色砂礫混じり粘質土（層厚0.1～0.2m）、9層は黒褐色礫混じり粘質土（有機物層・層厚0.3m）、10層はにぶい黄色砂礫（地山）である。

1～5層は盛土および廃土であり、特に4層には灰・炭化物が多量に混在する。6層は耕土層と考えられる。この6層からは土師器片1点が出土したため調査区を拡張したが、6層は削平を受けており、遺構、遺物を確認することはできなかった。7～9層より遺物は出土しておらず、堆積時期は不明である。9層は有機物層であり、層中より木の根を検出した。10層は地山であり、5～10cmの礫が多量に含まれていた。

調査の結果、中・近世の耕土と考えられる6層を検出したが、砂礫が多く混入することから二次堆積の可能性も考えられる。　（木嶋）

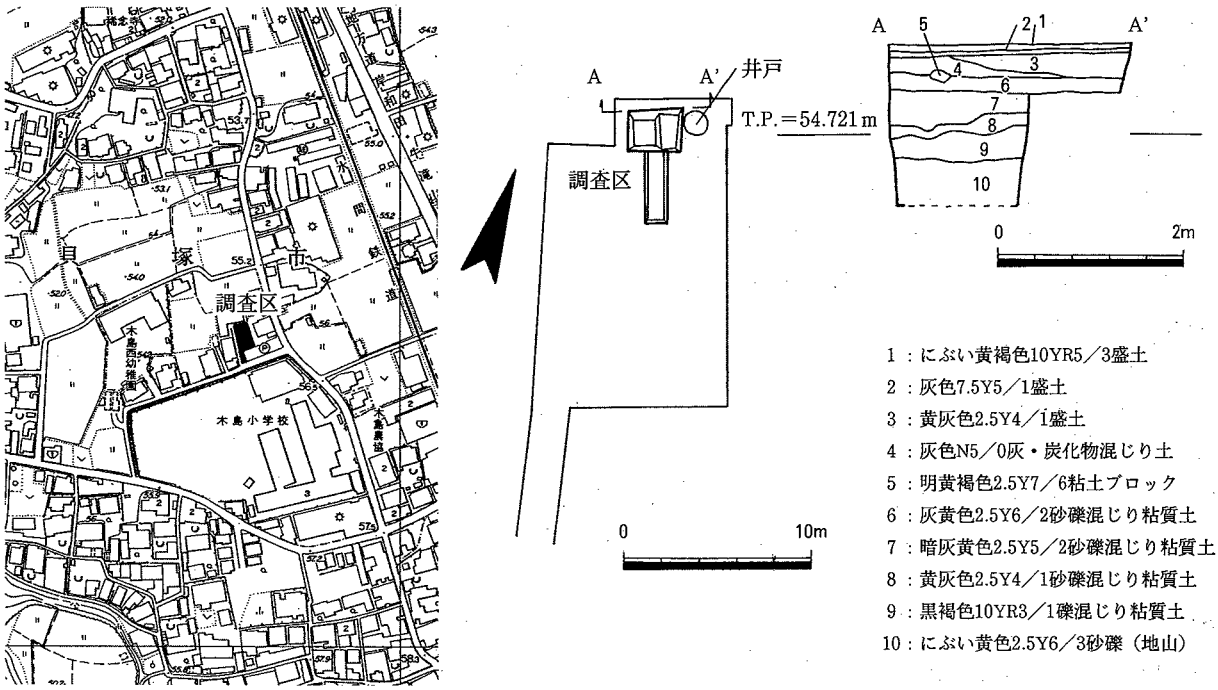


図12　2002－19区

8．木積遺跡

本遺跡は標高約80mに位置し、周知の遺跡として中世の散布地に推定されている。これまでの調査より中世の耕地跡に伴う鋤溝、溝を検出している。

2002－31区の調査　（図13）

本調査は、木積2135－3の一部において実施した。調査は浄化槽部分で4.05㎡の調査区を設定して行った。

調査区の層序は、1層は盛土（層厚0.6m）、2層は暗灰色盛土（層厚0.12m）、3層はオリーブ黒色盛土（層厚0.06m）、4層は灰色土、（層厚0.15～0.2m）、5層はオリーブ黄色砂混じり粘質土（層厚0.05m）、6層は灰色

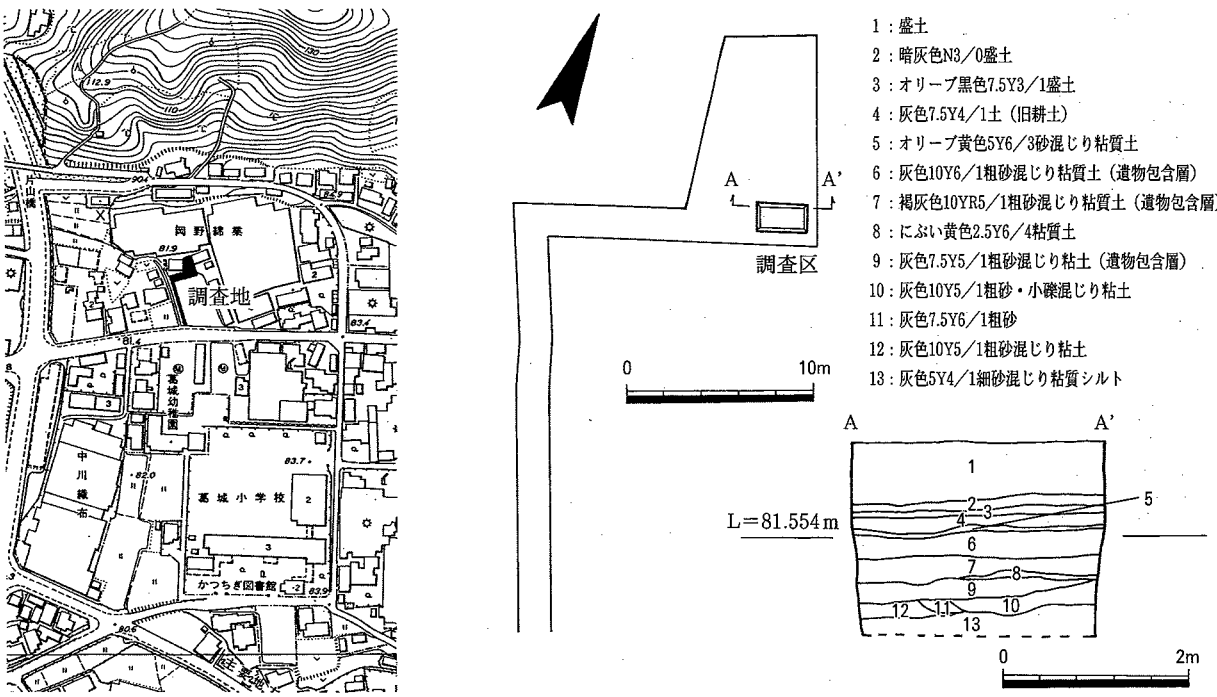


図13　2002－31区

色粗砂混じり粘質土（層厚0.2～0.25m）、７層は褐灰色粗砂混じり粘質土（層厚0.15～0.3m）、８層はにぶい黄色粘質土（層厚0.05m）、９層は灰色粗砂混じり粘土（層厚0.2m）、10層は灰色粗砂・小礫混じり粘土（層厚0.2m）、11層は灰色粗砂（層厚0.14m）、12層は灰色粗砂混じり粘土（層厚0.15m）、13層は灰色細砂混じり粘質シルト（層厚0.3m以上）である。６・７・９層は遺物包含層であり、土師器、瓦器の各小片が出土している。６層にはオリーブ黄色粘土ブロックが混じることから中世の耕土層と考えられる。９～13層は谷地形に堆積した粘土～粘質土層であり、特に10・11層は粗砂・小礫を多く含む。13層以下の調査については湧水のため確認することができなかった。調査の結果、谷地形は水成堆積により中世には埋没していたと考えられ、その後は耕地として利用されていた。（木嶋）

９．木積観音寺跡

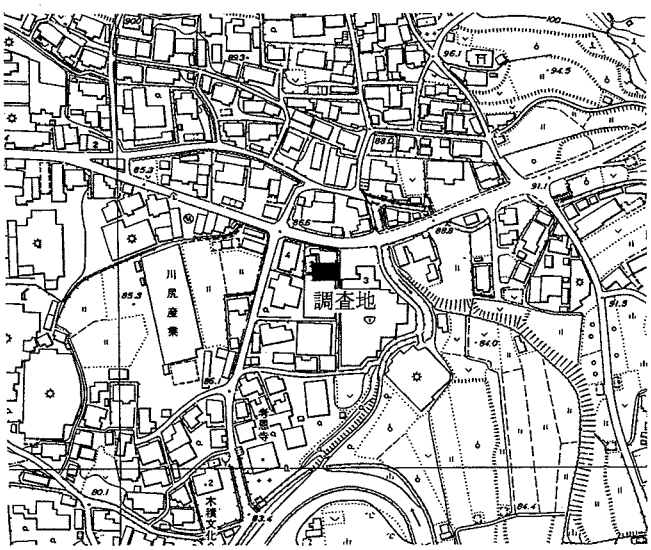
本遺跡は、近木川北岸の中位段丘上、標高約86mに位置する。周知の遺跡として平安時代～中世の寺院跡と推定される。本遺跡包蔵地内には俗に釘無堂とも呼ばれる国宝の観音堂が所在する。平成４年度の調査において中・近世の遺構を検出している。特に寺院の建物や区画に関係したと推測される溝を検出している。

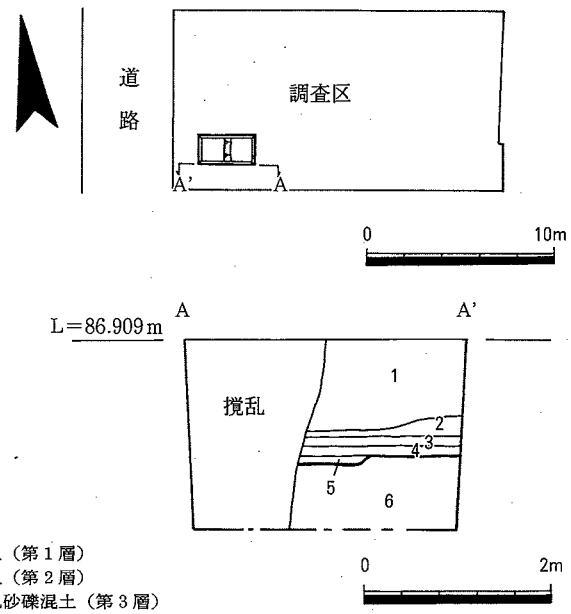
2001－62区の調査　（図14）

本調査は、木積1963－16において実施した。調査は申請地内西側の浄化槽設置部分に３×1.5mの調査区を設定して行った。

調査区東半部は建物基礎等によって撹乱されており、西半部において土層確認を行った。調査区には現代盛土（第１層、層厚0.8～0.95m）の下に４層堆積している。上層から茶褐色土（第２層、層厚0.05～0.2m）、暗紫灰色砂礫混土（第３層、層厚0.1m）、灰色砂質土（第４層、層厚0.1m）が堆積している。これらの層から遺物は出土していないが、周辺の調査例等から第２層が近世、第３～４層は中世の耕作に伴う層と考えられる。

第４層の下では落ち込みを検出した。東側に広がり、検出幅0.75m、深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色土である。撹乱に切られているため、溝等の遺構になるのか、耕作層であるのかは不明である。出土遺物はなく堆積時期は不明だが、周辺の調査例や上層との関係から中世と考えられる。地山は灰白色シルトで、現状地盤から約1.2mで検出した。（上野）





1：現代盛土（第１層）
2：茶褐色土（第２層）
3：暗紫灰色砂礫混土（第３層）
4：灰色砂質土（第４層）
5：淡灰色土（落ち込み）
6：灰白色シルト（地山）

図14　2001－62区

10. 新井ノ池遺跡

本遺跡は、近木川右岸の中位段丘上、標高約28mに位置し、周知の遺跡として弥生時代から古墳時代、中世にかけての散布地、集落跡と推定される。これまでの調査により平安時代の掘立柱建物跡や中・近世の耕地跡に伴う鋤溝、溝等を検出している。

2002－47区の調査　（図15　図版１）

本調査は、麻生中881－4において実施した。調査は申請地内に２ヶ所の調査区（調査区１：4.25㎡、調査区２：2.4㎡）を設定して行った。

調査区１の層序は、１層が盛土（層厚0.3m）、２層は旧耕土（層厚0.1m）、３・４層は撹乱（層厚0.25m）、５層は灰白色砂質シルト（層厚0.08m）、６層はにぶい黄色土混じり黄灰色粘質土（細かいマンガン斑含む・層厚0.2m）、７層は明黄褐色土ブロック混じり灰白色粘質土（層厚0.06m）、８層は灰白色粘質シルト（層厚0.05m）、９層は黄灰色粘質土（層厚0.1m）、10層は灰色砂質土（層厚0.08m）、11層は黄灰色粘質土（層厚0.08m）、12層は黄灰色微砂混じり砂質シルト（層厚0.06m）、13層はにぶい黄橙色粘質シルト（地山）である。

調査区２の層序は、１～２層が盛土・撹乱（層厚0.5～0.65m）、14層は灰白色砂質シルト（層厚0.5m）、15層はにぶい黄色粘質土（層厚0.08m）、16層はにぶい黄色土混じり灰色粘質土（層厚0.28m）、17層はにぶい黄色土混じり黄灰色粘質土（層厚0.1m）、18層は黄灰色粘質土（層厚0.15m）、19層は黄灰色粘質シルト（層厚0.1m）、20層は黄灰色粘質土（層厚0.05m）、21層はにぶい黄橙色粘質シルト（地山）である。

５～７層、15・17層は中・近世の耕土層と考えられ、５層と15層、６層と17層がそれぞれ対応する。９・11、18・20層は土質の締まった粘質土であり、マンガン斑を多く含むことから中世の耕土層と考えられる。６・７・９・11層からは土師器、瓦器の各小破片が出土している。遺構検出は８層上面（第１面）、地山上面（第２面）で行い、第１面では平行する２条の鋤溝（８層対応）、第２面ではほぼ直交するSD－１（10層対応）・SD－２（12層対応）を検出した。SD－１は調査区壁の断面観察により11層上面より掘り込まれており、土師器の細片が出土している。

調査区２の遺構検出は17層上面（第１面）、20層上面（第２面）で行った。第１面では調査区１で検出した鋤溝と対応すると推測したSD－３（16層対応）を検出したが、断面観察により深さ0.25mの溝と判明し、調査区１の鋤溝とは対応しない。第２面では調査区１のSD－１に対応する溝を検出した。調査区２より検出した遺構からは遺物は出土していない。

申請地北側の道路は小栗街道（熊野古道）と想定されており、近くには半田一里塚が残されている。検出した鋤溝やSD－１は、この街道と平行する一方、SD－２は直交しており、SD－２からSD－１へ至る時期において土地の区画が変更された可能性が考えられる。（木嶋）

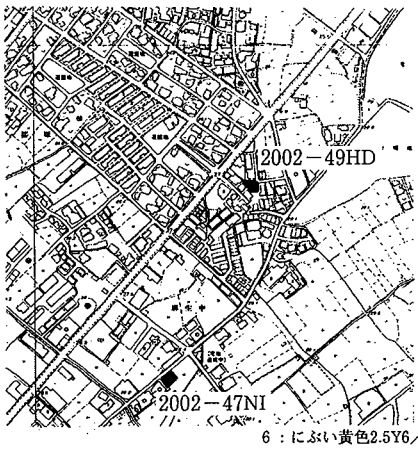
11. 半田遺跡

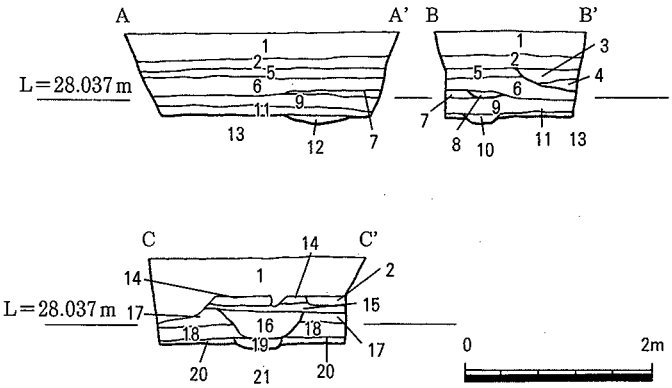
本遺跡は、近木川右岸の中位段丘上、標高約28mに位置し、周知の遺跡として中世の集落跡と推定される。本遺跡の西には寺院跡と推定される秦廃寺跡があり、白鳳期の瓦が多数出土している。また遺跡範囲内を熊野街道が縦貫しており、古代から中・近世に至る重要な交通路として発展してきた。これまでの調査により中・近世の耕地跡に伴う鋤溝、溝等を検出している。

2002－49区の調査　（図15　図版１）

本調査は、麻生中947において実施した。調査は申請地内において調査区を２ヶ所（計9.75㎡）を設定して行った。

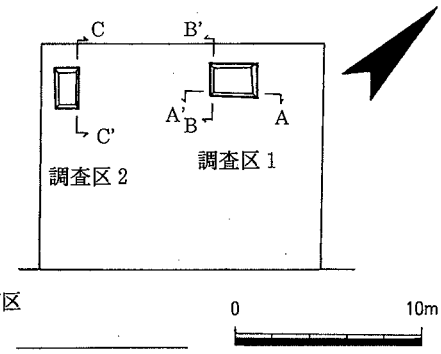
調査区１の層序は、第１層が現耕土（１層：層厚0.05～0.2m）、第２層は旧耕土（２層：層厚0.1m）、第３層は橙色粘質土（３層・層厚0.05m）、第４層は灰白色シルト（４層：層厚0.08m）、第５層はにぶい黄橙色土混じり灰白色シルト（７層：層厚0.08m）、第６層は褐灰色砂質シルト（８層：層厚0.08m）、地山は浅黄色シルト

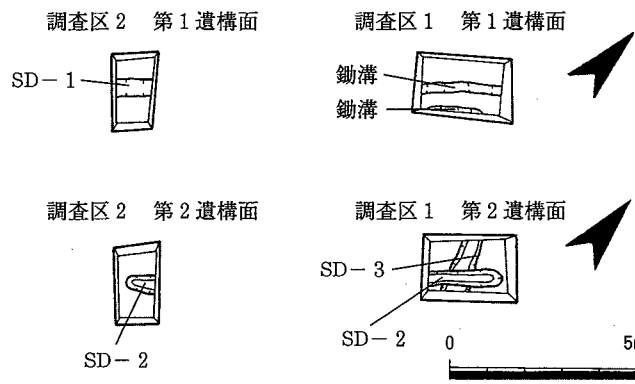


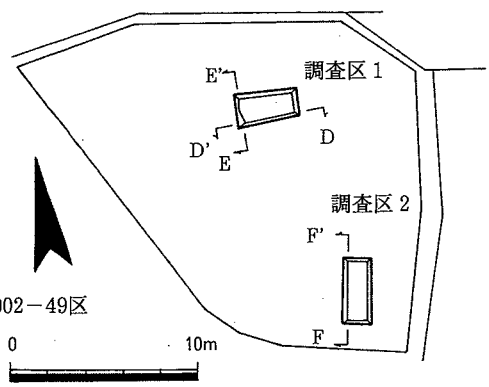


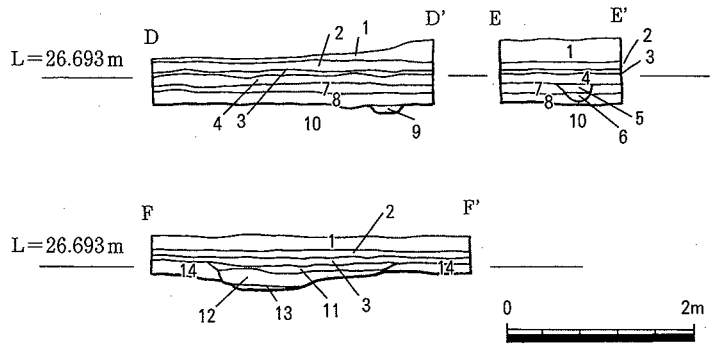
調査区1
1：盛土
2：旧耕土
3：撹乱
4：撹乱
5：灰白色10YR7／1砂質シルト
6：にぶい黄色2.5Y6／4土混じり黄灰色2.5Y6／1粘質土
7：明黄褐色2.5Y6／6土ブロック混じり灰白色2.5Y7／1粘質土
8：灰白色5Y7／1粘質シルト（鋤溝）
9：黄灰色2.5Y6／1粘質土（マンガン斑含む）
10：灰色5Y6／1砂質土（SD－2）
11：黄灰色2.5Y4／1粘質土（締まった土質）
12：黄灰色2.5Y5／1微砂混じり砂質シルト（SD－3）
13：にぶい黄橙色10YR6／4粘質シルト（地山）

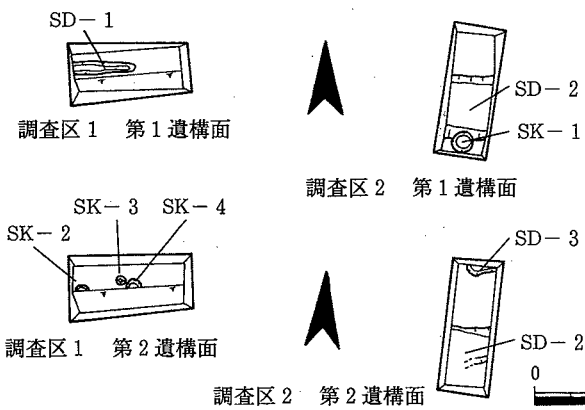
調査区2
14：灰白色10YR7／1砂質シルト
15：にぶい黄色2.5Y6／4粘質土
16：にぶい黄色2.5Y6／3土混じり灰色5Y6／1粘質土（SD－1）
17：にぶい黄色2.5Y6／4土混じり黄灰色2.5Y6／1粘質土
18：黄灰色2.5Y6／1粘質土（マンガン斑含む）
19：黄灰色2.5Y5／1粘質シルト（SD－2に対応）
20：黄灰色2.5Y4／1粘質土
21：にぶい黄橙色10YR6／4粘質シルト（地山）











調査区1
1：現耕土（第1層）
2：旧耕土（第2層）
3：橙色7.5YR6／6粘質土（第3層）
4：灰白色2.5Y7／1シルト（マンガン含む・第4層）
5：にぶい黄橙色10YR6／3土混じり灰白色2.5Y7／1シルト（SD－1）
6：灰白色2.5Y7／1シルト（SD－1）
7：にぶい黄橙色10YR6／4土混じり灰白色10YR7／1シルト（マンガン含む・第5層）
8：褐灰色10YR6／1砂質シルト（マンガン多量に含む・第6層）
9：灰白色5Y7／1シルト（SK－1）
10：浅黄色2.5Y7／3シルト（地山）
調査区2
11：黄灰色2.5Y6／1砂質シルト（マンガン多量に含む・SD－2）
12：褐灰色10YR6／1シルト（マンガン含む・SD－2）
13：褐灰色10YR6／1レキ混じり砂質シルト（SD－2）
14：灰白色2.5Y7／1砂質シルト（マンガン含む・第4層）

図15　2002－47区、2002－49区

(10層）である。第４～６層ではマンガン斑がみられ、特に第６層に多くみられた。第４・５層より土師器、須恵器の各破片が出土している。第６層上面において東西方向のSD－１を検出した。規模は検出長1.7m以上、幅0.3m、深さ0.12m、埋土は灰白色シルトである。西壁断面の観察によりSD－１は第４層より掘り込まれていることを確認し、遺物は土師器片が３点出土している。地山上面より土坑を３基検出した。いずれも直径・深さともに0.1m以下であり、埋土は灰白色シルトである。土坑の性格については不明である。

調査区２の層序は、第１～３層は現耕土、旧耕土であり、14層は灰白色砂質シルト（層厚0.15m）である。14層上面において土坑、流路を検出した。土坑は直径0.5m、深さ0.08mであり、土師器片が１点出土している。

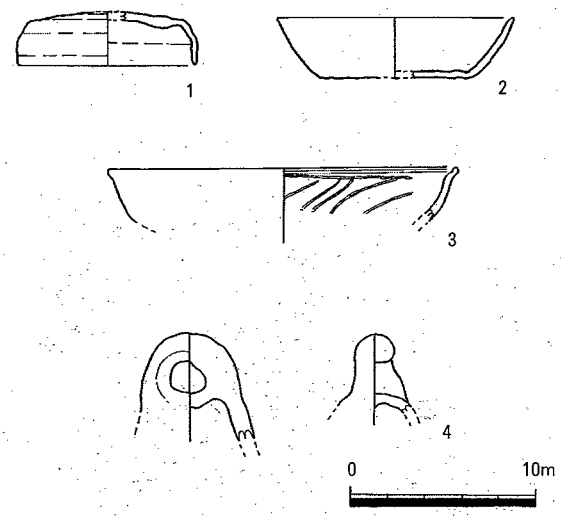


図16　2002－49区出土遺物

SD－２は東西方向の流路であり、幅２m、深さ0.26mである。出土遺物は、須恵器坏蓋（図16－１）、土師器杯（図16－２）、内面に放射状暗文が観察される土師器杯（図16－３）、土師質の蛸壺（図16－４）のほか、７世紀後半～８世紀にかけての土師器、須恵器が多く出土している。また流路上層において多量のマンガン斑を確認している。地山上面においてSD－３を検出し、埋土は褐灰色10YR6／1砂質シルトであり、須恵器片が１点出土している。

８層と14層は土質が類似することから両層は対応関係（第６層）にあると考えられるが、マンガン斑の含有量に差がみられる。調査区１・２の第３層は床土層であることから、申請地の南側は後世に土地の削平を受けていると考えられる。SD－２の埋没時期は出土遺物により８世紀頃と考えられる。申請地の北西方向には秦廃寺跡が所在することから、７～８世紀にかけて大規模な開発が行われたのであろう。第５層以後は耕地として営まれている。（木嶋）

12. 加治・神前・畠中遺跡

本遺跡は近木川右岸の中位段丘上、標高11～20mに位置する。これまでの調査で、弥生時代の井戸跡、古墳時代前期の掘立柱建物跡、古墳時代後期の竪穴住居跡、古代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡等を検出しており、古代においては集落跡もしくは公的施設が存在した可能性がある。また平成12年度の調査において平安時代の瓦窯跡を10基検出しており、生産施設の存在していたことが明らかとなった。

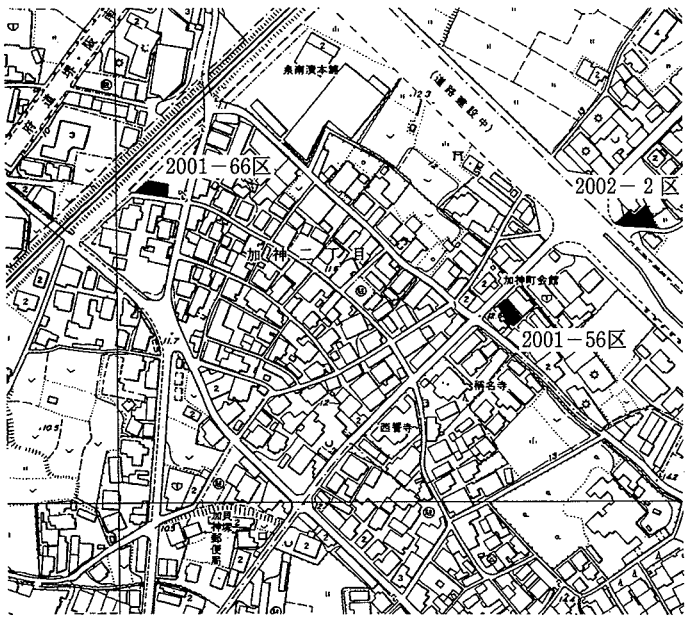
2001－56区の調査　（図17）

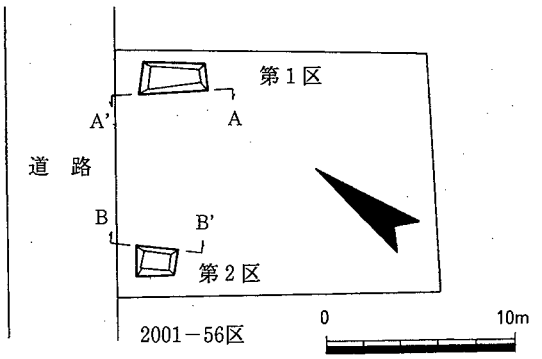
本調査は、加神２－228－1、228－3、228－4、228－5、228－6において実施した。調査は２ヵ所（計8.25㎡）の調査区を設定して行った。

第１区の地層の状況は、１層が盛土（層厚0.54m）、２層は耕作土（層厚0.18m）、３層は暗灰黄色土（層厚0.18m）、４層は黄灰色砂混じり暗灰黄色土（層厚0.12m）、５層は黒褐色粘土（層厚0.54m）で地山は黒褐色粗砂混じり土（７層）である。

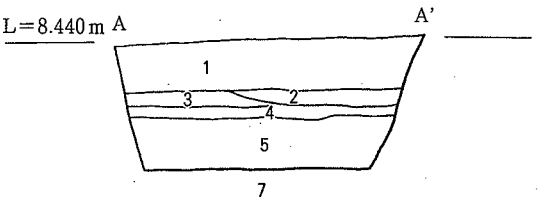
第２区は１層が盛土（層厚0.58m）、２層は耕作土（層厚0.3m）、５層は黒褐色粘土（層厚0.43m）、６層は暗灰黄色礫砂（層厚0.28m）、で地山は第１区と同様、黒褐色粗砂混じり土（７層）である。

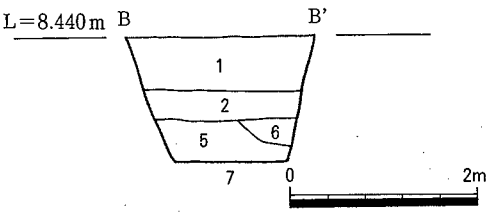
第２区の６層は層の状況から撹乱を受けている。出土遺物は第１区、４層から土師器片、５層からは土師器細片が出土している。４層は出土遺物から中世に位置づけられる遺物包含層である。５層は周辺の調査例から判断して大溝もしくは流路の埋土である可能性が高い。５層の時期は出土した土師器細片から判断することは難しいが、周辺調査例とあわせて考えると奈良時代～平安時代の時期と推定される。（三浦）

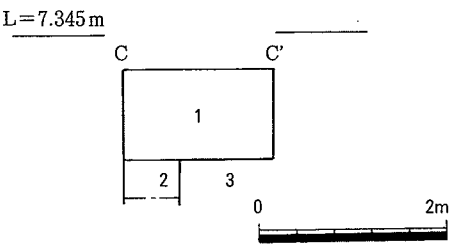




2001－56区

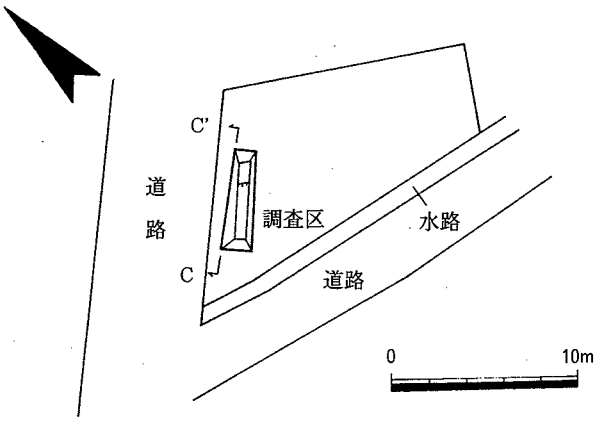




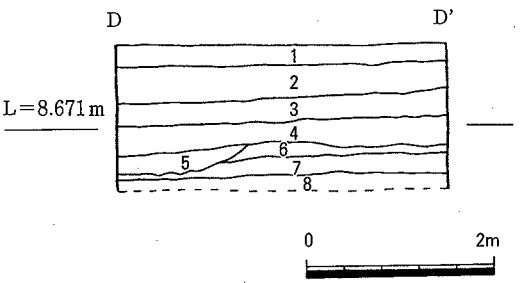


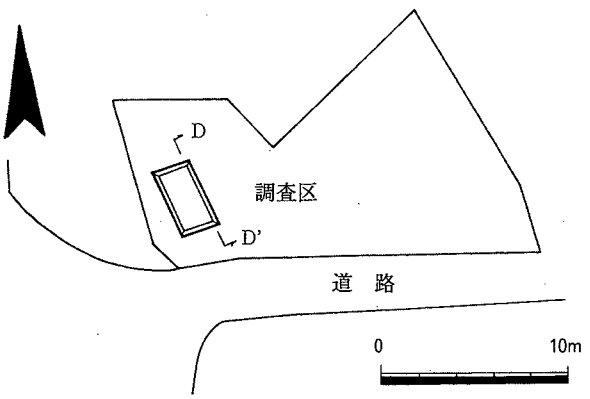
1：現代盛土
2：暗青灰色粘質土～シルト
3：淡黄色粗砂（地山）

1：盛土
2：耕作土
3：暗灰黄色2.5Y5／2土
4：黄灰色2.5Y6／1砂混じり暗灰黄色2.5Y5／2土
5：黒褐色2.5Y3／1粘土
6：暗灰黄色2.5Y5／2礫砂
7：黒褐色2.5Y3／1粗砂混じり土（地山）



2001－65区





2002－２区

1：灰黄褐色10YR5／2土
2：褐灰色10YR5／1土
3：暗灰黄色2.5Y5／2土
4：黒褐色2.5Y3／1土
5：黄褐色2.5Y5／3礫
6：灰黄色2.5Y6／2粘質シルト
7：灰色5Y5／1粘質シルト
8：にぶい黄色2.5Y6／3礫

図17　2001－56区、2001－66区、2002－２区

2001－66区の調査　（図17）

本調査は、加神2－279－12において実施した。調査は開発地内の北西部に調査区（5.4㎡）を設定して行った。

調査区には層厚0.95mの現代盛土の下に暗青灰色粘質土～シルト（第2層）が堆積している。これは人為的な堆積とは考えられず、自然流路である。申請地南東の下水管引き込みに伴う掘削区にも堆積が認められるため、流路は南東から北西に流れていたと考えられる。調査区北西では第2層は堆積せず、盛土直下で地山の淡黄色粗砂層を検出した。遺構、遺物は確認できなかった。

このことにより、調査区では南東から北西に流れる流路の影響で、古くからの開発は行われていなかったと考えられる。（上野）

2002－2区の調査　（図17）

本調査は、加神1－100、99－1の各一部において実施した。調査は申請地西側において2m×4m（8㎡）の調査区を設定して行った。

調査区の層序は、第1層が灰黄褐色土（層厚0.25m）、第2層は褐灰色土（層厚0.4m）、第3層は暗灰黄色土（層厚0.25m）、第4層は黒褐色土（層厚0.2m）、第5層は黄褐色礫（層厚0.2m）、第6層は灰黄色粘質シルト（層厚0.15m）、第7層は灰色粘質シルト（層厚0.2m）、第8層はにぶい黄色礫である。第1層から第3層は旧耕土であり、第3層は旧耕土と第4層が混在し、小礫を多量に含む。第4層はコークス・灰・礫などが多量に認められる近・現代の廃土層である。第5層は建物基礎部の敷石と考えられ、第6層を掘り下げて拳大の礫を敷き詰めている。第6層からは遺物は出土していないが、周辺の調査例によりおそらく中・近世の耕土の可能性がある。第7層は地下水の影響を受けてグライ化しており、遺物は出土していない。第8層は砂礫層であるが、湧水が顕著なため地山か旧河川堆積かの判断はできなかった。

調査の結果、中・近世の耕土層と考えられる第6層を調査区壁面で検出したが、近・現代において土地の削平を受けており、遺構を検出することはできなかった。（木嶋）

2002－15区の調査　（図18）

本調査は、石才150－1の一部において実施した。調査は2ヵ所（計7.59㎡）の調査区を設定して行った。

第1区の地層の状況は、盛土（層厚0.44～0.5m）、耕作土（第1層、層厚0.2m）、黄褐色土（第2層、層厚0.2～0.3m）、黄褐色粘質土（第3層、層厚0.2～0.3m）でその下は地山（第4層、明黄褐色粘土）である。

第3層は遺物包含層であり、瓦器が出土している。遺構は溝1条を検出しており、溝の方向は南東－北西方向で検出長1.5m、幅2m以上、深さ1.1mである。埋土は3層に分けられる。第5層は第3層、黄色粘土ブロック混じりの埋め戻し土である。遺物は瓦器、瓦が出土しており、中世の遺物のみが出土している。第6層は灰白粘土、第7層は黄灰色砂でともに遺物は出土していない。本溝の時期は、溝の埋土（第6層、第7層）から遺物が出土していないため、埋め戻し土（第5層）の出土遺物から判断すると中世以前に掘削された可能性が高い。

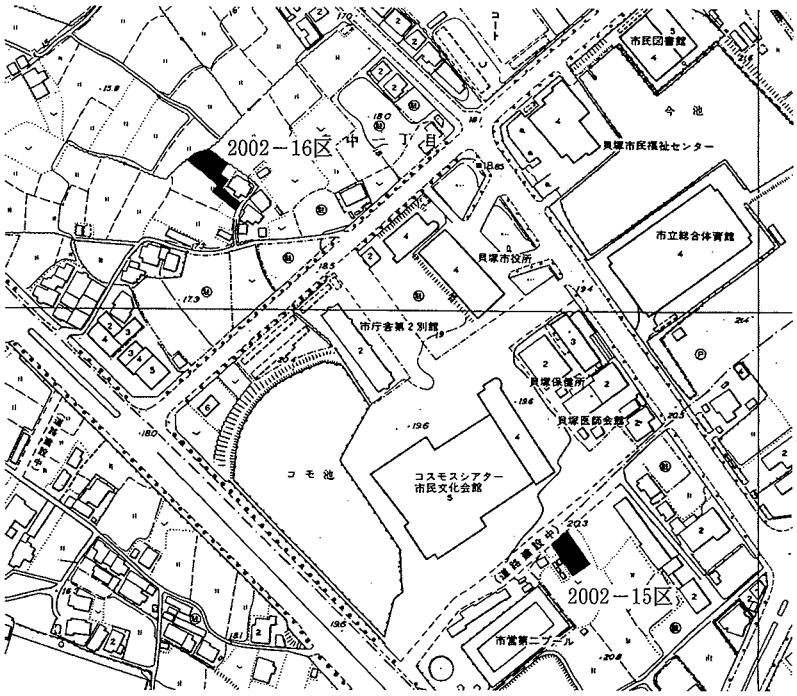
第2区の地層の状況は、耕作土（第1層、層厚0.15m）、黄褐色土（第2層、層厚0.2m）、黄褐色粘質土（第3層、層厚0.2m）でその下は地山（第4層、明黄褐色粘土）で第1区と同じ状況である。第3層は遺物包含層であり、瓦器が出土している。遺構は鋤溝1条、柱穴1基を検出した。鋤溝は南西―北東方向で第3層を埋土としており中世の鋤溝と考えられる。柱穴は暗灰黄色土の埋土で遺物は出土していない。柱穴の時期は、埋土の状況から中世と考えられる。

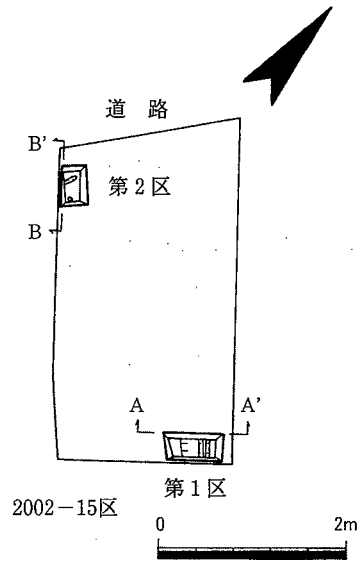
調査の結果、中世の溝、鋤溝、柱穴を検出した。また、中世の遺物包含層が存在する事が明らかとなった。

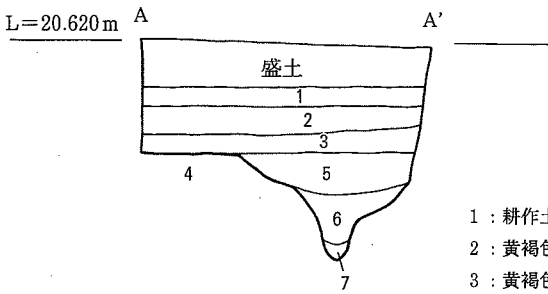
（三浦）

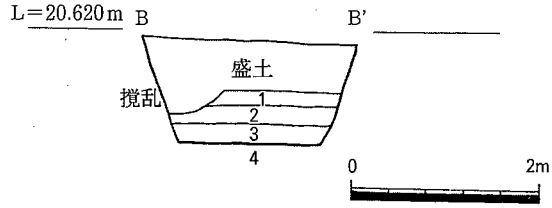
2002－16区の調査　（図18）

本調査は、畠中1－204－8の一部、204－10において実施した。調査地の小字名は「三郎五郎」である。調査は

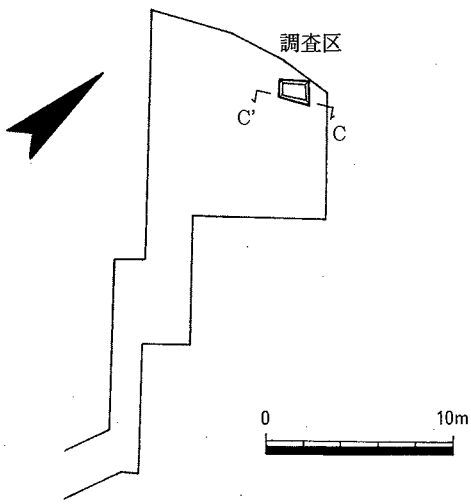


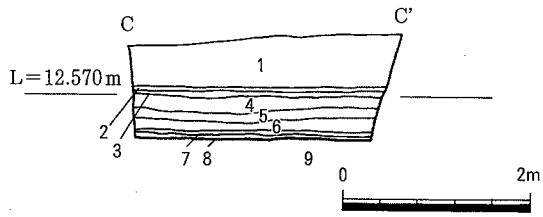






1：耕作土
2：黄褐色2.5Y5／4土
3：黄褐色2.5Y5／3粘質土
4：明黄褐色2.5Y6／6粘土
5：黄色粘土ブロック混じり黄褐色2.5Y5／3粘質土
6：灰白色2.5Y7／1粘土
7：黄灰色2.5Y6／1砂





1：表土・バラス
2：灰色N5／0土
3：灰白色7.5Y7／1砂質土
4：灰白色2.5Y7／1砂質土混じり灰黄色2.5Y6／2砂質土
5：灰色2.5Y7／1砂質シルト混じり10YR6／2灰黄褐色粘質シルト
6：にぶい黄色2.5Y6／3粘質土混じり灰色5Y7／1砂質シルト
7：にぶい黄色2.5Y6／3粘質土
8：黄灰色2.5Y5／1粘質土
9：オリーブ黄色5Y6／3粘質シルト（地山）

図18　2002－15区、2002－16区

申請建物に伴う浄化槽部分において調査区（6.2㎡）を設定して行った。

調査区の層序は、第１層は表土・バラス層、第２層は灰色土（旧耕土）、第３層は灰白色砂質土、第４層は灰白色砂質土混じり灰黄色砂質土、第５層は灰色砂質シルト混じり灰黄褐色粘質シルト、第６層はにぶい黄色粘質土混じり灰色砂質シルト、第７層はにぶい黄色粘質土、第８層は黄灰色粘質土、第９層はオリーブ黄色粘質シルト（地山）である。第４～６層は遺物包含層であり、土師器、瓦器、須恵器、青磁等の破片が出土している。この遺物包含層は土質から中世の耕土層と考えられる。第７・８層より遺物が出土していないため時期は不明であるが、周辺の調査例と考え合わせると中世の耕土層と考えられる。第９層（地山）上面において遺構検出作業を行ったが、後世に土地の削平をうけているため遺構は検出できなかった。（木嶋）

2002－17区の調査　（図20　図版２）

本調査は、診療所兼共同住宅の建築工事に伴い、加神1－140－1において実施した。調査は、申請建物基礎部分を中心に４ヵ所（計61.5㎡）の調査区を設定し、平成14年６月27日から６月28日にかけて確認調査を行った。

調査の結果、各調査区において地表面から1.2m～1.3m下で良好に遺物包含層が存在することが判明し、瓦器、土師器等の破片が約80点出土した。また各調査区の地山上面において遺構検出を行った結果、調査区２～４で南北方向と東西方向の鋤溝痕跡を数条検出した。

発掘調査は、開発計画に基づき、特に開発による破壊を受ける杭基礎部分について調査区（調査区１：３m×38m、調査区２：4.5m×38m、計238㎡）を設定して行った。

調査は、確認調査の結果を基に地山直上層まで機械掘削し、地山上面において遺構検出を行った。

調査区１の層序は、１層～３層が盛土（層厚1.2m）、４層は旧耕土（層厚0.1～0.2m）、５層は暗灰黄色土（層厚0.8m）、６層は黄褐色砂質土（層厚0.8m）、７層は暗灰黄色土（層厚0.1～0.2m）、８層は暗灰黄色粗砂混じり土（層厚0.02m）、９層は褐灰色粘質シルト（層厚0.08m）、10層は黄褐色礫混じり土（地山）、11層は黄色粘土（地山）である。

調査区２の層序は、１・２層が盛土（層厚１m）、３層は旧耕土（層厚0.18m）、４層は明黄褐色粘質土（層厚0.1m）、５層は黄褐色粘質土（層厚0.1～0.15m）、６層は黄褐色土（層厚0.1m）、７層は褐灰色粘質シルト、８層は浅黄色粘質土（地山）、９層はにぶい黄色粘土（地山）である。

調査区１では５～８層、調査区２では４～６層が遺物包含層である。遺物包含層からは土師器、瓦器、須恵器、黒色土器、青磁が出土している。これらの遺物包含層の時期は中世と考えられる。また凹基形のサヌカイト製石鏃（図17－１）が中世の遺物包含層より出土している。側縁が直線的であり、全体形が二等辺三角形を呈す。SD－01よりサヌカイト製石器（図17－２）が出土している。このことから縄文・弥生時代の遺物包含層が存在していたことを示唆するものであろう。

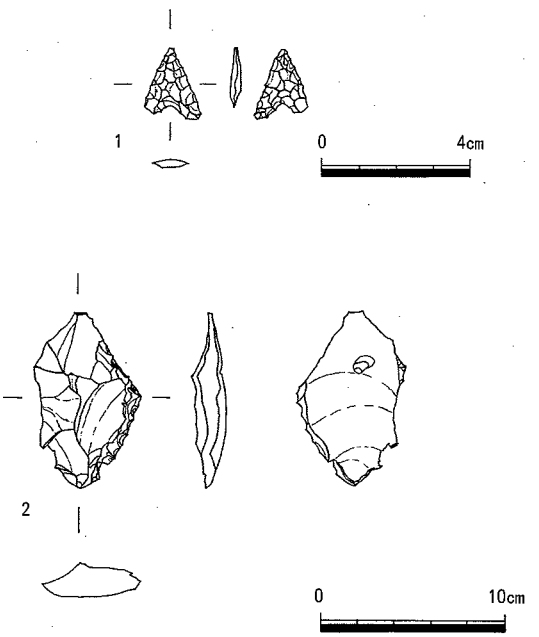


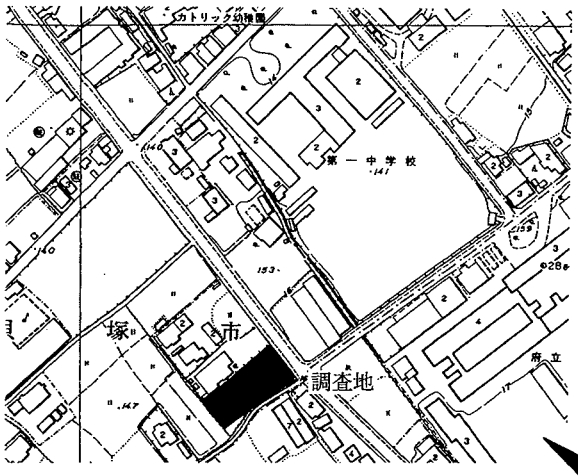
図19　2002－17区出土遺物

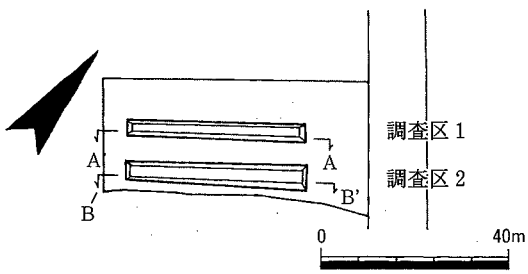
検出遺構

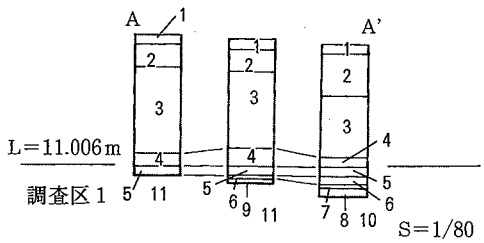
調査区１・２の地山上面において遺構検出を行い、溝、鋤溝、落込み遺構を検出した。

SD－１

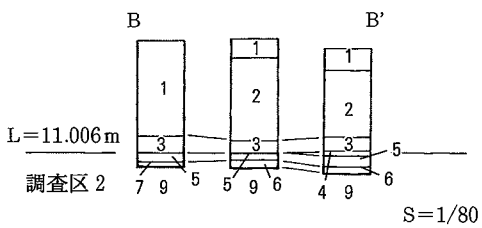
本遺構は、調査区１にほぼ平行する東西方向の溝である。検出長26m、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土はオ







調査区1
1：盛土
2：盛土
3：盛土
4：旧耕土
5：暗灰黄色2.5Y5／2土
6：黄褐色2.5Y5／4砂質土
7：暗灰黄色2.5Y5／2土
8：暗灰黄色2.5Y5／2粗砂混じり土
9：褐灰色10YR5／1粘質シルト
10：黄褐色2.5Y5／3礫混じり土（地山）
11：黄色2.5Y6／3粘土（地山）



調査区2
1：盛土
2：盛土
3：旧耕土
4：明黄褐色2.5Y6／6粘質土
5：黄褐色2.5Y5／3粘質土
6：黄褐色2.5Y5／3土
7：褐灰色10YR5／1粘質シルト
8：浅黄色2.5Y7／3粘質土（地山）
9：にぶい黄色2.5Y6／3粘土（地山）

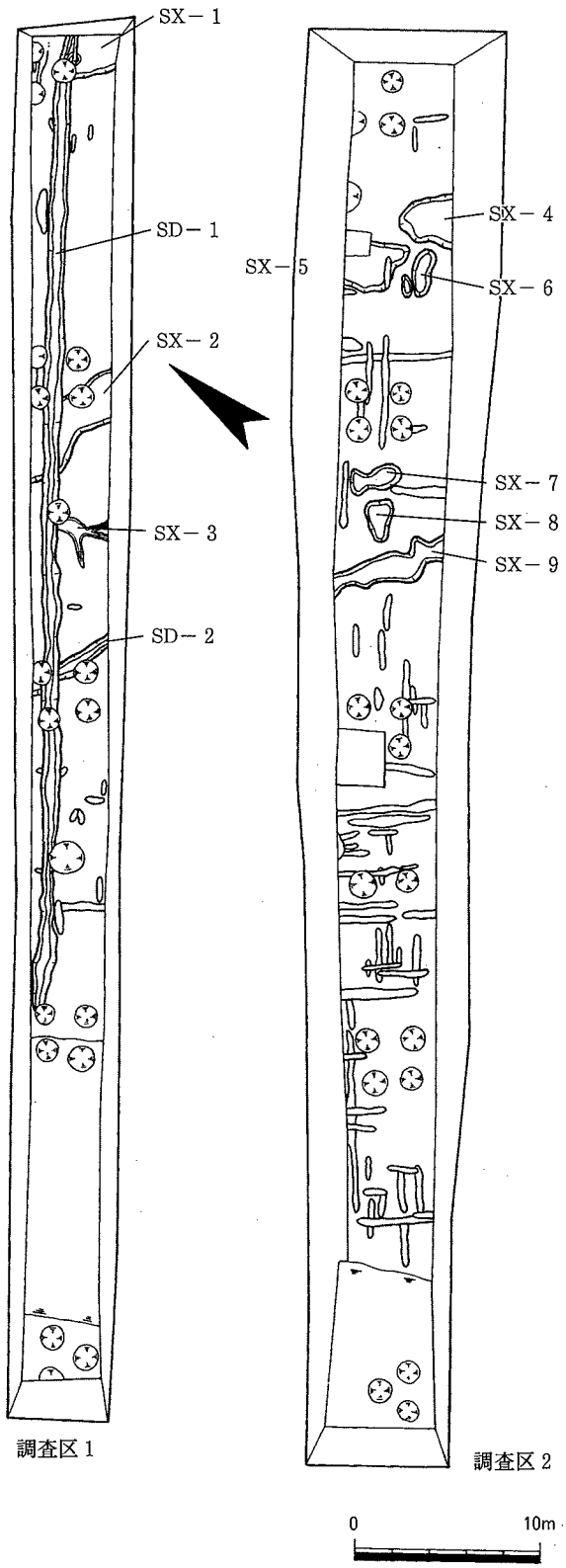


図20　2002－17区

リーブ灰色5Y5／2土であり、一部溝底部において粗砂が堆積することから、少なくとも1回は掘り直しが行なわれていたと考えられる。出土遺物は土師器、瓦器とともにサヌカイト製石器（図17－2）が出土している。石器は肉厚であり、側縁部に刃部を作り出す。右側縁部は細かい調整を行っている。本遺構は鋤溝と重複関係にあり、鋤溝を切っていることから、耕地化開始以後、新たに設けられた中世の水利施設と考えられる。

SD－2

本遺構は調査区1の中央部で検出した南北方向の溝である。検出長0.25m、幅0.4m、深さ0.1mである。埋土は上層が黄灰色2.5Y5／1シルト、下層が灰白色5Y7／1砂である。SD－1と重複関係にあり、SD－2の方が時期は古い。遺物は出土していない。

鋤溝

これらの遺構は、調査区1・2にほぼ平行および直交する鋤溝痕跡である。東西方向の鋤溝の埋土は黄灰色2.5Y6／1シルト、南北方向は灰色5Y5／1シルトである。鋤溝は一部重複しており、東西方向の鋤溝を南北方向の鋤溝が切っているとみられる。

落込み遺構（SX－1～9）

これらの遺構は、調査区1・2の東部で検出した落込み遺構である。埋土は褐灰色10YR5／1シルトであり、多量のマンガン斑を含む。この埋土は調査区1・2の東部で地山上面において薄く堆積する層（調査区1：9層、調査区2：7層）である。調査区1・2ともに落込み遺構から遺物は出土していないため時期は不明であるが、一部褐灰色シルト層上面において鋤溝を検出していることから、耕地化以前に形成した層と考えられる。

まとめ

調査区1・2の地山上面より溝、鋤溝等の耕地に伴う遺構を検出した。調査区1ではSD－1を検出した。SD－1は地山上面で検出したが、6層上面において確認していた。このSD－1は水利施設であるとともに坪境溝としての役割をもっていたと考えられる。おそらく中世以降に土地区画が変化したのであろう。（木嶋）

13. 小瀬五所山遺跡

本遺跡は、市北部に位置する弥生～古墳・中世の散布地・集落跡である。津田川右岸下流域の河岸段丘上、標高は7.3m～10.7mに立地する。

2002－34区の調査　（図21　図版3・4）

本調査は、小瀬371－5他地内において開発により掘削し、埋蔵文化財に影響の及ぶ部分（道路部分）、合計450㎡について実施した。調査区北側を除いて、調査区の南側はコンクリート基礎などによって大きく撹乱を受けている。調査区北側の状況は基礎掘削により撹乱を受け、島状に遺構が残る部分が存在する。島状に残る部分に1～6まで番号を与えた。検出遺構の概要については表にまとめた。以下、調査の概要を示す。

1の地層堆積状況は、上層より盛土（層厚0.4m）、にぶい黄褐色礫混じり砂質土（第2層、層厚0.1m）、黄褐色粘質シルト（地山）である。第2層は遺物包含層である。遺構は土坑SX－201を検出した。検出長3m、検出幅2.1m、深さ0.1mである。埋土は黄褐色礫混じり粘質土で、遺物は須恵器、土師器が出土している。

2の地層堆積状況は、上層より盛土（層厚0.2m）、撹乱層（層厚0.3m）、耕作土（層厚0.1m～0.15m）、黄褐色粘質シルト（地山）である。遺構は検出できなかった。遺物は出土していない。

3の地層堆積状況は、上層より盛土（層厚0.5m）、耕作土（層厚0.15m～0.2m）、にぶい黄褐色礫混じり砂質土（第2層、層厚0.1m～0.2m）、黄褐色粘質シルト（地山）である。第2層は遺物包含層である。遺構は検出できなかった。遺物は出土していない。

4の地層堆積状況は、盛土（層厚0.1m）、撹乱層（層厚0.2m）、耕作土（層厚0.1m～0.2m）、黄褐色粘質シルト（地山）である。遺構は検出できなかった。遺物は出土していない。

5の地層堆積状況は、盛土（層厚0.1m）、盛土（層厚0.2m）、耕作土（層厚0.1m～0.2m）、にぶい黄色礫混じり砂質土（第3層、層厚0.4m）、黄褐色粘質シルト（地山）である。第2層は遺物包含層である。

遺構は土坑SX－202、土坑SX－205、柱穴Pit－206を検出した。５では４に比べて約0.4m高い位置で耕作土層を検出しており、耕作地の段差があったのではないかと考えられる。土坑SX－202は撹乱されているため全体の規模は確認できなかったが、検出長３m、深さ0.1mである。埋土は灰黄褐色粘質土で、南側部分は土坑SX－205に掘削されている。遺物は土師器が出土している。土坑SX－205は撹乱を受けているため全体の規模は確認できなかったが、検出長1.7m、深さ0.15mである。埋土は灰黄褐色砂質土で土坑中央部に柱穴Pit－206を検出した。遺物は出土していない。柱穴Pit－206は、土坑SX－205内で検出した。直径0.5m、深さ0.2mで柱痕が残る。埋土は灰黄褐色砂質土で遺物は土師器が出土した。

６の地層堆積状況は、盛土（層厚0.05m）、撹乱層（層厚0.4～0.5m）、黄褐色土（第２層、層厚0.1m）、黒褐色粗砂混じり土（第３層、層厚0.2～0.4m）、黄褐色粘質シルト（地山）である。第２層、第３層は遺物包含層である。遺構は溝２条（SD－204、SD－226）、柱穴20基（Pit－203、207～215、218～225、227、230～232）、土坑４基（SX－216、217、228、229）を検出した。溝SD－204は最大幅2.4mで深さ0.55mである。埋土は２層（上層：黒褐色土10YR3／2、下層：暗褐色土10YR3／3）に分けられ、遺物は弥生土器、土師器が出土している。出土した弥生土器は弥生時代中期のものであり、掘削時期が弥生時代まで遡る可能性がある。溝SD－226は最大幅1.9mで深さ0.4mである。埋土は２層（上層：黒褐色粗砂混じり土10YR3／2、下層：黒褐色細砂～粗砂混じり土10YR3／1）に分けられ、遺物は弥生土器、土師器が出土している。出土した弥生土器は弥生時代中期のもので溝SD－224同様に掘削時期が弥生時代まで遡る可能性がある。

柱穴は掘立柱建物として復元可能なものが２棟ある。それぞれ建物A、建物Bとする。建物A（柱穴Pit－210、207、203、209、218、213、214、215、219、220、223、228）は、柱穴の直径が0.8m～１mで深さが0.5m以上、３×３間以上で調査区外に建物がのびる可能性がある。遺物は土師器、須恵器が出土しており古墳時代以降の建物と考えられる。建物B（柱穴Pit－212、221、230、232、224）は、柱穴の直径が0.3m～0.4mで柱間が1.7mで深さ0.1m～0.25mである。調査区外に建物が広がること、撹乱によって破壊されている部分があり復元できない部分もあるが、１間×２間以上である。柱穴からの出土遺物は土師器のみであり、建物Aより古く位置付けられる可能性がある。建物A、Bともに溝SD－204、206が埋没してから掘削している。

出土遺物（図21）

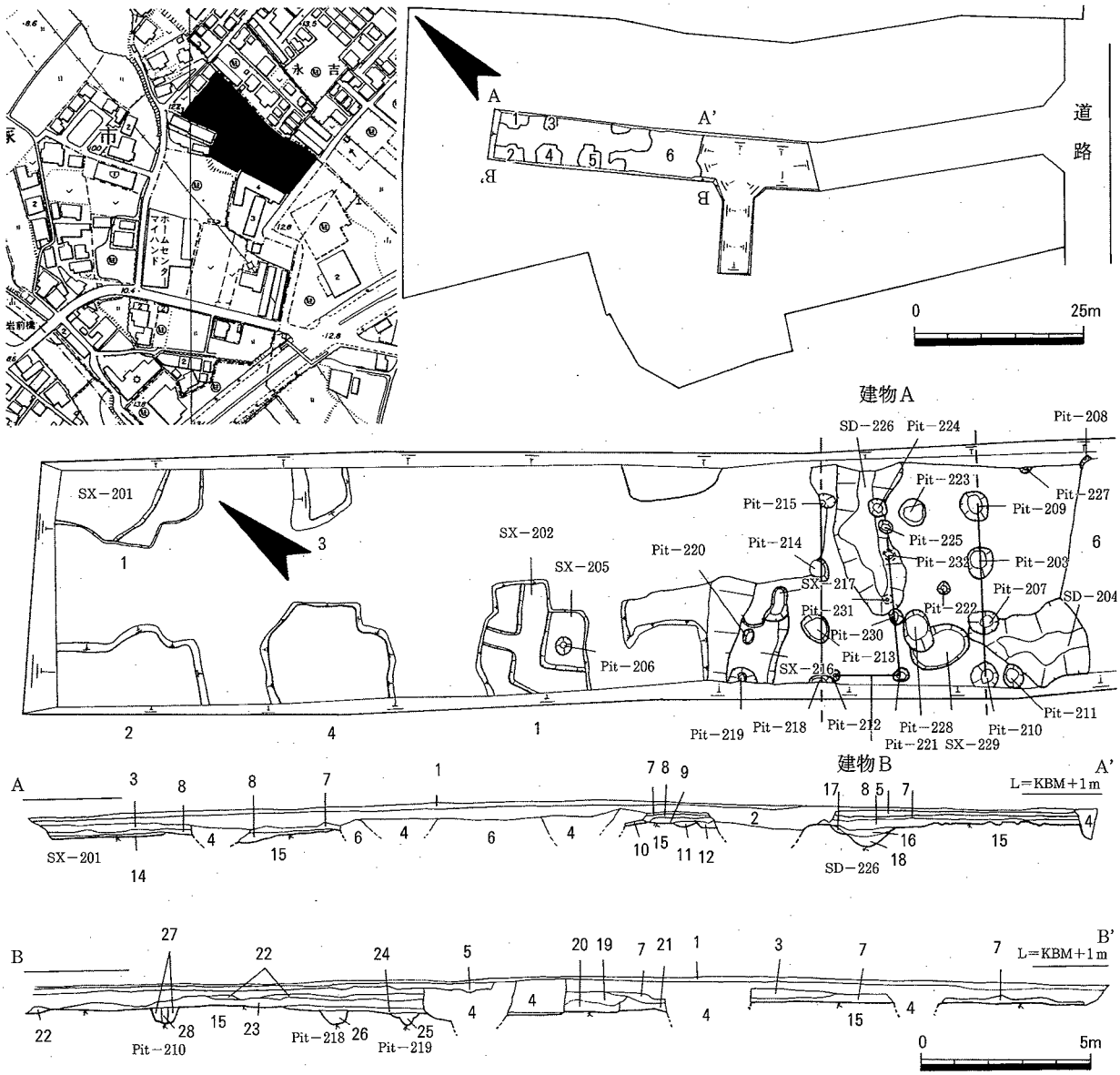
遺物は１、５、６の遺構および遺物包含層（第２層、第３層）から出土した。遺物は石器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。比較的残りの良い遺物について実測を行った。以下、概要を示す。

１は遺物包含層第２層出土の須恵器杯蓋である。口径13.8cm、器高3.8cmである。２～８は遺物包含層第３層出土の須恵器である。２は口径15.2cm、器高3.7cmの杯蓋である。３は宝珠つまみ付の杯蓋である。４～６は杯身である。４は口径10.4cm、器高3.2cmである。５は口径12.6cm、器高3.5cmである。６は口径13cm、器高3.4cmである。７、８は高杯脚部である。７は２方向、２段の透かしである。８は脚部径10.8cm３方向の透かしである。出土した須恵器は３が奈良時代のものであるが、他の遺物は６世紀～7世紀代のものが中心であり、遺構からの出土遺物も同様である。９、10はSD－204出土の弥生土器壺である。ともに弥生時代中期のものである。９は直口壺の頸部で波状文、櫛描き直線文を施す。10は体部片で櫛描き直線文を施す。

まとめ

調査の結果、１、５、６にて遺構を検出した。特に６においては溝２条、柱穴20基、土坑４基を検出し掘立柱建物が２棟復元できる結果を得た。撹乱等によって建物が復元できない柱穴もあり、調査地には数棟の建物が建っていたと考えられる。建物A、建物Bの建物の発見、土器の出土によって集落が存在した可能性が高く、建物Aは規模が大きく集落でも中心となる建物と考えられる。遺物は石器、弥生土器、土師器、須恵器が出土しており、６～７世紀代の土器を中心とした遺物が出土しており、津田川流域右岸の歴史を考える上で有効な成果となった。

（三浦）



1：盛土
2：黄褐色土（2.5Y5/3、盛土）
3：暗灰黄色土（2.5Y5/2、盛土）
4：灰白色土（2.5Y7/1、攪乱）
5：コンクリート土間
6：灰黄色土（2.5Y7/2）、コンクリート混じり（盛土）
7：灰色土（N4/0、旧耕作土）
8：にぶい黄色礫混じり砂質土（2.5Y6/3、第2層）
9：黄灰色土（2.5Y4/1）、灰黄色砂質土（2.5Y6/2）混じり
10：褐灰色礫混じり粘質土（10YR4/1、第3層）
11：黄灰色礫混じり粘質土（2.5Y4/1）
12：黄灰色粘質土（2.5Y4/1）、暗灰黄色土（2.5Y5/2）混じり
13：黄褐色粘質土（2.5Y5/3）・黄灰色粘質土ブロック混じり土（2.5Y4/1）（第3層）
14：黄灰色礫混じり粘質土（2.5Y4/1、SX−201埋土）
15：黄褐色粘質シルト（2.5Y5/3、地山土）
16：黒褐色粗砂混じり土（10YR3/2、SD−226埋土）
17：黄褐色粘質シルト（2.5Y5/3、地山）・黒褐色粗砂混じり土（第16層、SD−226埋土）
18：黒褐色細砂〜粗砂混じり土（10YR3/1、SD−226埋土）
19：にぶい黄色礫混じり砂質土（2.5Y6/3、第2層）
20：灰黄褐色粘質土（10YR5/2、SX−202埋土）
21：浅黄色土（2.5Y7/3）
22：にぶい黄色礫混じり砂質土（2.5Y6/3、第2層）
23：褐灰色礫混じり粘質土（10YR4/1、第3層）
24：黒褐色粗砂混じり土（10YR3/2）
25：黒褐色粗砂混じり土（10YR3/2、Pit−219埋土）
26：黒褐色粗砂混じり土（10YR3/2、Pit−218埋土）
27：にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3、Pit−210埋土）
28：にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3、Pit−210柱痕部埋土）

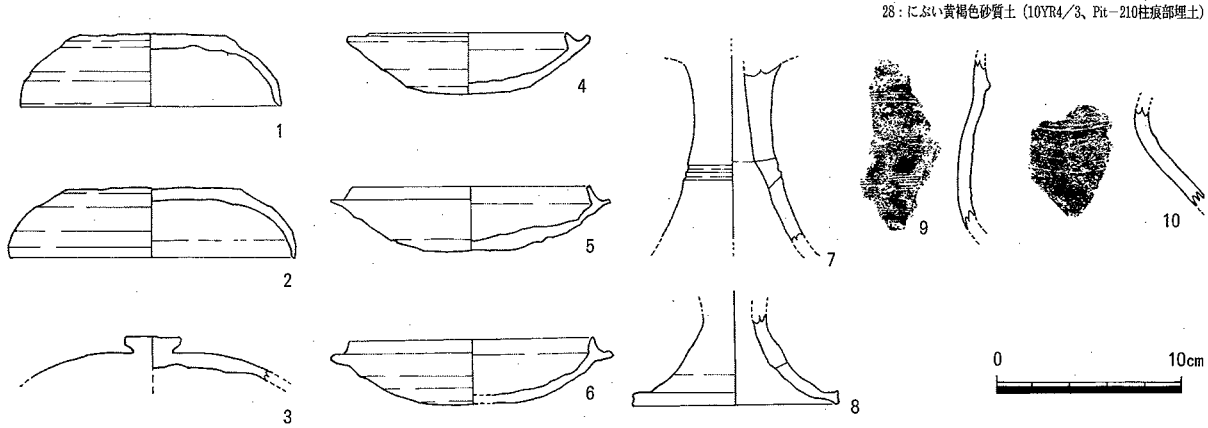


図21　2002−34区

通番	種別	遺構番号	地区	埋　　土	長さ	幅	深さ	出土遺物	備考
1	SX	201	1	黄灰色礫混じり粘質土	3.20	2.00	0.10	土師器、須恵器	
2	SX	202	5	浅黄色土	3.20	2.20	0.20	土師器、須恵器	
3	Pit	203	6	黒褐色土（10YR3／1）黄褐色土混じり	0.80		0.50	土師器、須恵器	建物A
4	SD	204	6	黒褐色土（10YR3／2）、暗褐色土（10YR3／3）	3.50	2.00	0.55	弥生土器、土師器	
5	SX	205	5	灰黄褐色砂質土	1.70	1.30	0.30		
6	Pit	206	5	灰黄褐色砂質土	0.65			土師器	
7	Pit	207	6	黒褐色土（10YR3／1）黄褐色土混じり	0.71		0.37	土師器、須恵器	建物A
8	Pit	208	6	黒褐色砂質土（10YR3／1）	0.28		0.25		
9	Pit	209	6	黒褐色土（10YR3／1）黄褐色土混じり	0.90		0.25	土師器、須恵器	建物A
10	Pit	210	6	にぶい黄褐色砂質土、柱痕部（やや黄色い）	0.78		0.32	土師器、須恵器	建物A
11	Pit	211	6	黒褐色土（10YR3／1）黄褐色土混じり	0.55		0.30		
12	Pit	212	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）	0.30		0.10	土師器	建物B
13	Pit	213	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）	0.80		0.12		建物A
14	Pit	214	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）	0.63		0.22	土師器	建物A
15	Pit	215	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）	0.63		0.36		建物A
16	SX	216	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）3～4cmの礫を含む	1.90	1.40	0.13	土師器	
17	SX	217	6	暗褐色砂質土（10YR3／3）	0.90	0.40	0.13	土師器	
18	Pit	218	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）礫を含む	0.78		0.39		建物A
19	Pit	219	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）5cm大の礫を含む	0.85		0.35	土師器	建物A
20	Pit	220	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）やや暗い	0.45	0.30			建物A
21	Pit	221	6	黒褐色砂質土（10YR2／2）地山土混じり	0.45		0.15		建物B
22	Pit	222	6	にぶい黄褐色土（10YR4／3）	0.35		0.12		
23	Pit	223	6	暗褐色細砂混じり土（10YR3／3）	0.72		0.11	土師器	建物A
24	Pit	224	6	黒褐色砂質土（10YR2／2）	0.45		0.25		建物B
25	Pit	225	6	にぶい黄褐色砂質土（10YR2／2）	0.25		0.09		
26	SD	226	6	黒褐色粗砂混じり土（10YR3／2）、黒褐色細砂～粗砂混じり土（10YR3／1）	4.40	1.95	0.48	弥生土器、土師器	
27	Pit	227	6	暗褐色砂質土（10YR3／3）	0.24		0.14	土師器	
28	Pit	228	6	にぶい黄褐色砂質土（10YR4／3）1cm程度の礫を含む	1.20	0.98	0.11	土師器 石器（剥片）	建物A
29	SX	229	6	にぶい黄褐色土（10YR4／3）地山部分で2～3cmの礫多し	1.80	1.20	2.10	土師器	
30	Pit	230	6	暗褐色砂質土（10YR3／3）	0.40		0.15		建物B
31	Pit	231	6				0.35		
32	Pit	232	6	黒褐色砂質土（10YR2／2）					建物B

図21　2002－34区遺構一覧表

14. 地蔵堂丸山古墳（2002－41区）の調査

1．はじめに

地蔵堂丸山古墳（以下丸山古墳という）は貝塚市地蔵堂198に所在する前方後円墳である。近木川左岸の台地上に築かれ、現状は全長約70m、前方部最大幅約27m、高さ約４m、後円部径約43m、高さ約５mを測る。

大正11年(1922)の「大阪府全史」には天正13年(1585)に豊臣秀吉が根来攻めを行った際に本陣となったと記されている。昭和27年には大規模な土砂採取が行われ、大阪府による緊急立会調査が実施された。調査報告によると古墳の原形を良くとどめ、葺石、埴輪、濠を確認したとされている。

昭和31年には国史跡に指定され、昭和33年貝塚市が管理団体に指定されている。

丸山古墳の南には、古墳時代中期の古墳が集中して築かれている。市立小学校の増改築の際に発見されたもので、現在までに円墳２基、方墳２基を確認している。このことにより近木川左岸台地上に、丸山古墳をはじめとして古墳時代中期に至るまで古墳群が形成されていることが判明した。これらを地蔵堂古墳群として位置づけている。また、近接して平安時代後期の地蔵堂廃寺が存在する。昭和56年の正福寺境内における発掘調査では金堂と塔の基壇跡を確認している。周囲は地蔵堂古墳群、地蔵堂廃寺跡を包括した形で、古墳時代から中世にかけての集落跡である地蔵堂遺跡が存在する。地蔵堂遺跡では中世の掘立柱建物跡や井戸等を検出している。さらに南には熊野街道が通り、平安時代からのゆかりのある寺院・神社等が多く存在している。また、東には中世に根来衆の拠点となった積善寺城や近木庄村々の惣墓とされる橋本墓地が存在する。このように地蔵堂周辺地域は古墳～中世、近世にかけての史跡等が集中し、古来より重要な地点であったと考えられる。

本調査は平成12年度から継続して実施している丸山古墳の外周溝改修及び管理用フェンス設置による現状変更に伴うものである。今年度は平成13年度に引き続いて、管理用フェンス設置に伴う土層確認トレンチ調査を実施した。調査は後円部北側に３箇所の調査区を設定した。調査区は1.5×５mの規模で、東側より第１～３区とした。第２区についてはフェンス設置部分の土層確認のため、東半部のみ更に北側へ約２m拡張した。また、第３区については葺石を確認し、状況確認のため南に約１m拡張した。

以下、各調査区の検出状況について詳述する。

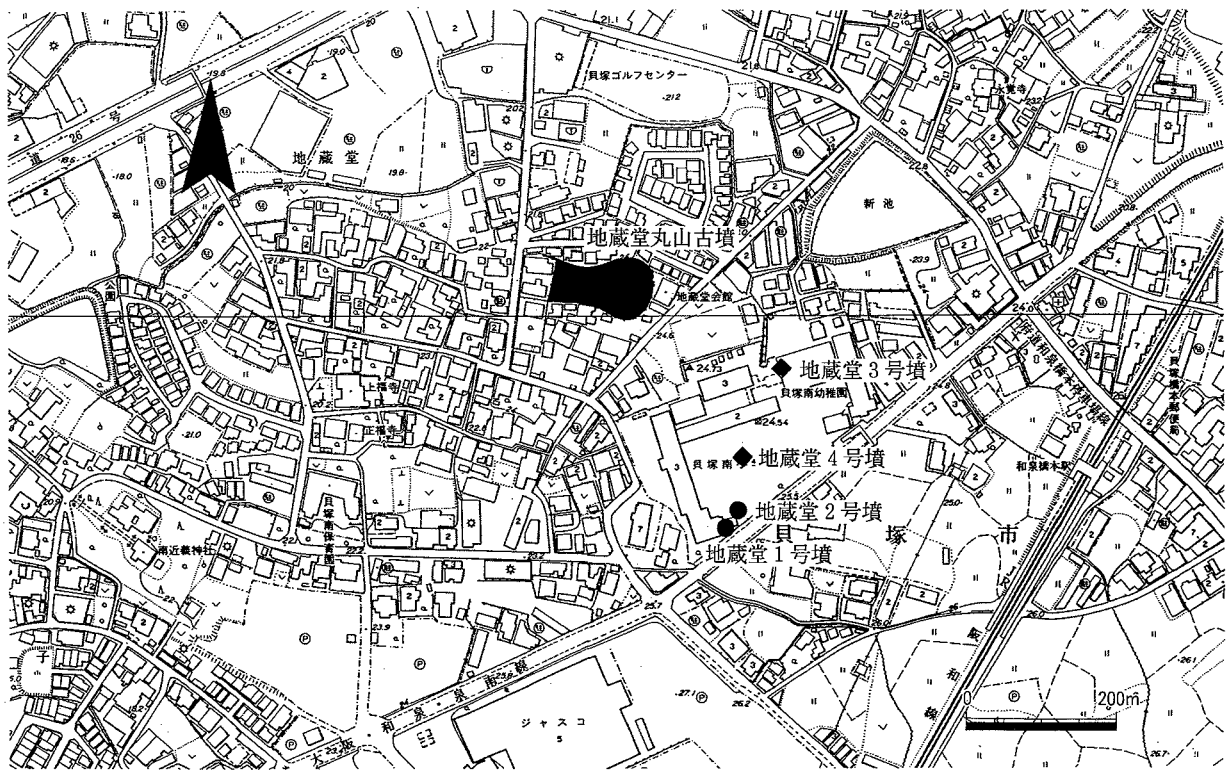
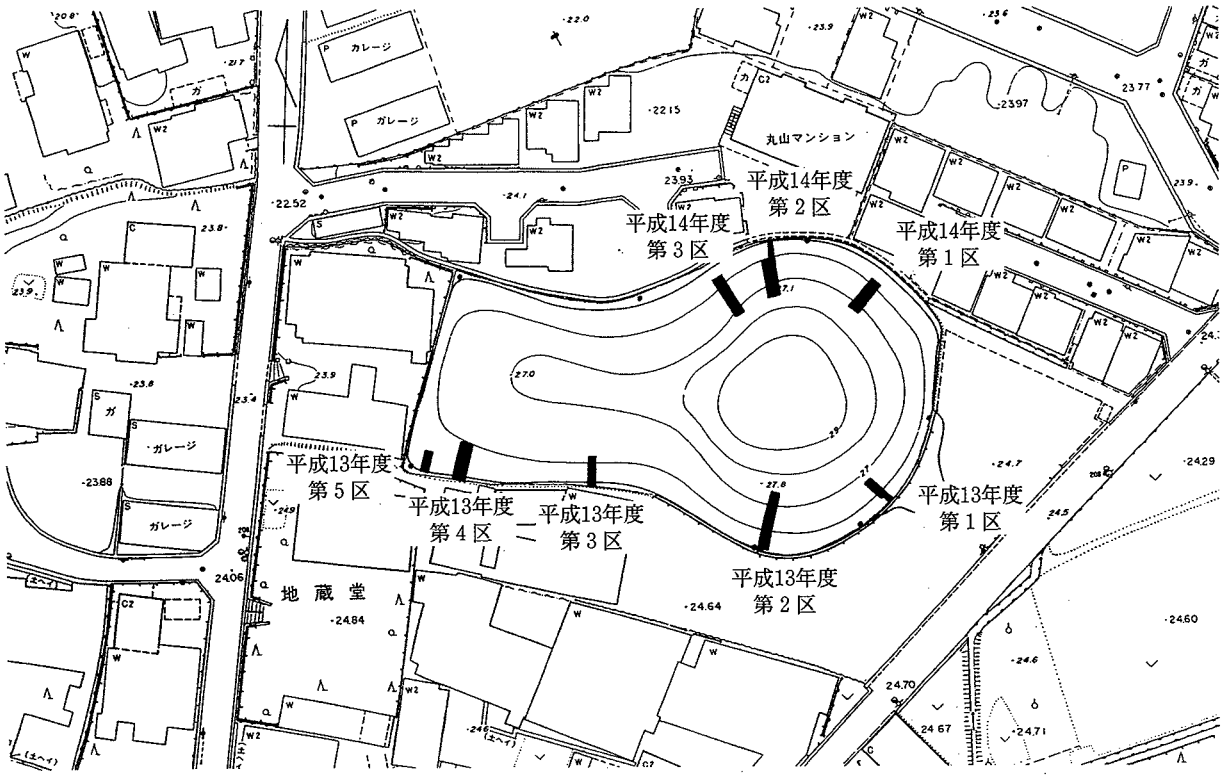


図22　地蔵堂古墳群位置図

2．検出遺構

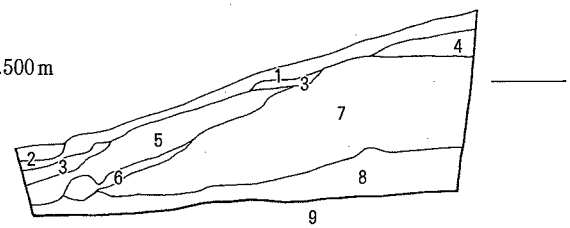
第１区（図23・図版５）

表土（第１層）および現代撹乱層（周囲の住民による踏分け道、第２層）を取り除くと３～８層はすべて盛土層である、第３～４層は表土に伴う層と考えられるが、第５～８層はほぼ同時期に一括して入れた盛土である。現地表下0.7～1.9mにて明褐色(7.5YR5／8)砂礫混粘質シルト層（第９層）に達する。下面はほぼ平坦である。



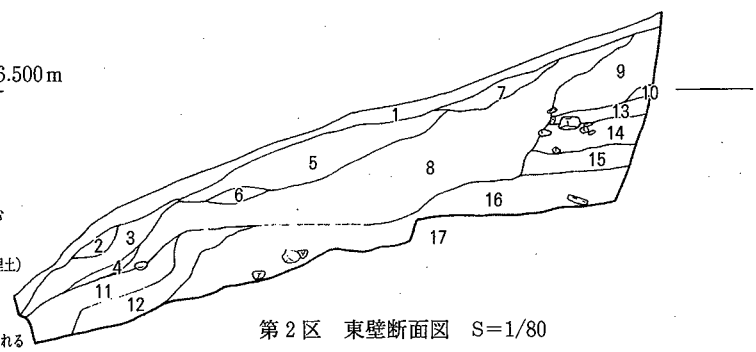
調査位置図　S＝1/1000

第１区
1：黒褐色（10YR3／1）土
2：褐色（7.5YR4／6）砂礫混土
3：黒褐色（10YR3／1）土と橙色（7.5YR6／8）粘質土ブロック、淡黄色（2.5Y8／4）粗砂～中砂との混在土
4：明褐色（7.5YR5／6）砂礫混粗砂
5：明黄褐色（10YR7／6）細砂～中砂　1～3cm大の灰白色（2.5Y7／1）粘質土ブロック含む
6：黒褐色（5YR3／1）砂礫混粘質シルト
7：浅黄色（2／5Y7／4）砂礫混粗砂～細砂　3～15cm大の灰白色（2／5Y7／1）粘質土ブロック含む
8：浅黄色（2.5Y8／4）極細砂　5cm大の灰白色（N8／0）粘質土ブロック含む
9：明褐色（7.5YR5／8）砂礫混粘質シルト（地山?）



第１区　東壁断面図　S＝1/80

第２区
1：灰黄褐色（10YR4／2）土
2：褐色（7.5YR4／6）砂礫含土
3：にぶい黄褐色（10YR4／3）砂礫含土
4：褐色（7.5YR4／6）土
5：橙色（7.5YR6／8）砂礫混シルト
6：明黄褐色（10YR6／8）粘質シルト
7：明褐色（7.5YR5／6）粘質シルト
8：明褐色（7.5YR5／6）　2～5cm大の砂礫混土
9：黄褐色（10YR5／6）粘質土に３cm大の灰白色（10YR8／1）粘質土ブロック含む
10：明褐色（7.5YR5／8）砂礫混粘質シルト
11：褐色（7.5YR4／6）粗砂　層中に５～15cm大の川原石多量に含む（近現代石垣埋土）
12：明褐色（7.5YR5／8）0.5～5cm大の砂礫少量含む
13：暗赤褐色（5YR5／6）シルト　2～3cm大の砂礫少量含む
14：にぶい黄褐色（10YR5／3）砂礫混シルト　上層及び層中に15～25cm大の石を入れる
15：赤褐色（5YR4／6）1～5cm大の砂礫混シルト
16：にぶい黄褐色（10YR4／3）砂礫混土
17：明褐色（7.5YR5／8）砂礫含粘質シルト



第２区　東壁断面図　S＝1/80

図23　調査区位置図、第１区・第２区断面図

このため、上層の盛土は昭和27年に行われた土砂採取時の復旧土であると考えられ、土砂採取により築造時の墳丘面は全く残っていないことが明らかになった。

遺物は盛土中からは出土せず、第９層の直上で円筒埴輪片が１点出土した。

第２区（図23・図版６）

表土（第１層）を取り除くと、近現代層（２～10・16・17層）が堆積している。調査区南端（墳頂部）から1.1～1.8mの範囲は現地表面下0.7～0.9mにて0.05～0.15m大の石群を検出する。北側は大きく削平を受け石群は残っていない。盛土最下層より19世紀代の陶磁器が出土するため、近世以降に削平を受けたものと考えられる。周辺の聞き取りでは大規模な土採取のほかに壁土用に古墳周囲の土を採取していたとのことである。墳丘裾はさらに近世以降に築かれた石垣により大きく改変されている。石垣は南側調査時にも検出しており、近世から何度も作り直されている。

調査区南側で検出した石群は粗密はあるものの調査区全面を覆っていたと考えられる。石群の上には腐植土層（第13層）が覆っており、石群が一定期間に面として存在していたことを示している。石群は検出当初、葺石の可能性を考えた。しかし下層の赤褐色砂礫混シルト層（第15層）は安定した状況になく、堆積状況から墳丘土とは考えにくい。また、層中より埴輪片が出土することから、全て盛土であり、石群は後世のものと判断した。第15層の下層にて明赤褐色粘質シルト層を検出した。第３区にて検出した墳丘面と同一層で、墳丘土と考えられる。明赤褐色粘質シルト層は南側では25.1～25.3mにて検出するが、北に向かって下がり、墳丘裾の石垣下面では約24.1mにて地山面を検出し、墳丘は残存していない。したがって、墳丘土の痕跡は確認されたが、築造当時の墳丘面は後世に改変を受けたため残っていないことが確認された。また、墳丘裾部においては近世からの石垣により墳丘土も残っていない。

遺物は上層の盛土内から近世以降の陶磁器、瓦が出土したほか、削平を受けた際に壊された埴輪片（円筒埴輪、形象埴輪）が出土した。

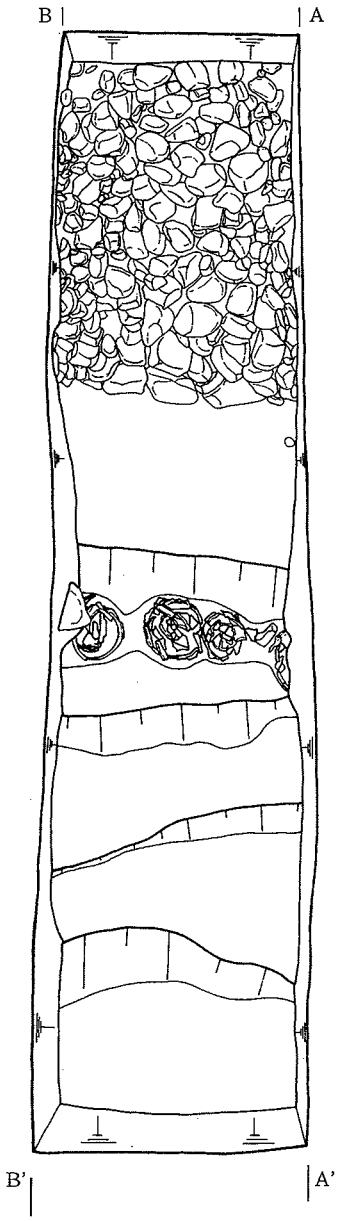
第３区（図24・図版７～10）

表土（第１層）を取り除くと、近現代盛土層（２～５・11～12層）が堆積している。調査区南端（墳頂部）から1.7～1.9mの範囲は現地表面下0.5～0.7m（25.9～26.1m）にて0.05～0.15cm大の石群を検出する。石群はほぼ全面に広がっていたと考えられるが、北側が近現代に大きく削平を受けたため残っていない。墳丘裾はさらに近世以降の石垣により大きく改変されている。石垣より外側では耕作が行われていたと考えられ、地山面を畦畔として利用し、明褐色砂礫混土（第６層）の耕作土が堆積している。

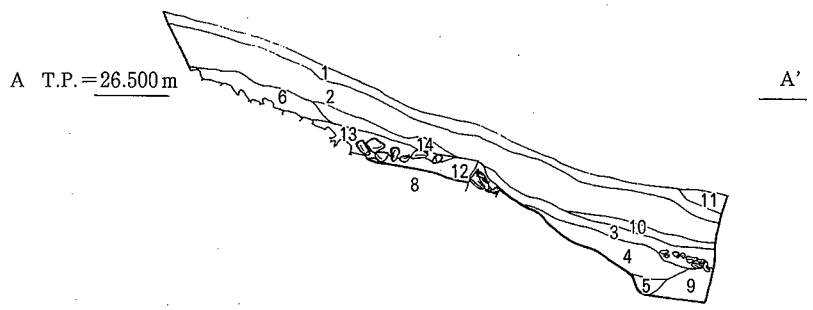
石群は第２区同様後世に設置したものである。石群を覆う腐植土層（第７・15層）及び石群を取り除くと、明赤褐色粘質シルトの墳丘面及び埴輪列と葺石を確認した。埴輪列は調査区に対して北西に約10°振って、４基の円筒埴輪を検出した。埴輪は基底部より１段目の突帯まで残存していた。おそらくテラス端部に近い場所に埴輪列を配していると考えられる。直径は約30cmに復元できる。埴輪間は狭く、約0.1mである。掘方は幅0.35～0.4mの溝状を呈し、検出長は1.5mである。断面逆台形を呈し、墳丘面より約0.1～0.15m掘削し、約0.02mの厚さで砂礫含赤褐色粘質シルトを入れ、埴輪を樹立し、赤褐色粘質シルトを埋めて埴輪を固定している。埴輪基底部埋設高は約0.1mである。下層の砂礫含赤褐色粘質シルトは埴輪列の高さを調整するために入れたものと考えられる。

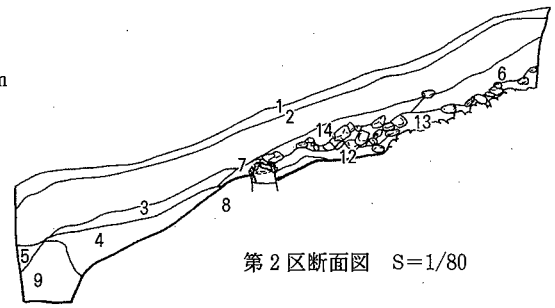
埴輪列より南側約１mはテラス部分と考えられる。テラスは平坦ではなく墳頂部にかけて緩やかに上昇し、斜面を形成する。位置的に１段目のテラス部分と考えられる。

葺石は斜面部に0.2～0.3cm大の川原石を積んでいる。２段目の斜面に葺かれたものと考えられる。石の大きさや葺き方など上部の石群とは明らかに異なるものである。最下段は0.25～0.4m大の石を横長に並べて基底石とし、そこから丁寧に石垣状に積み上げる。積み上げ時の基準石については可能性の高いものはあるが不明である。葺石の状況を確認するため南側に約１m拡張し、検出長は1.7～1.8mである。斜面部は25.9～26.5mで傾斜角は



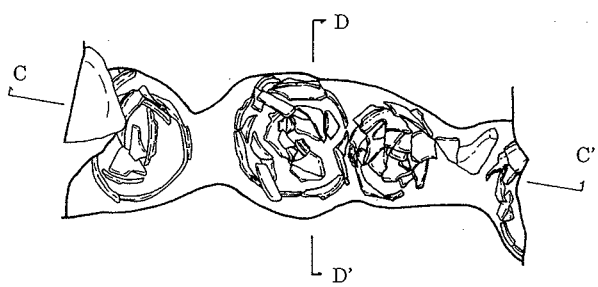
第２区断面図　S＝1/200

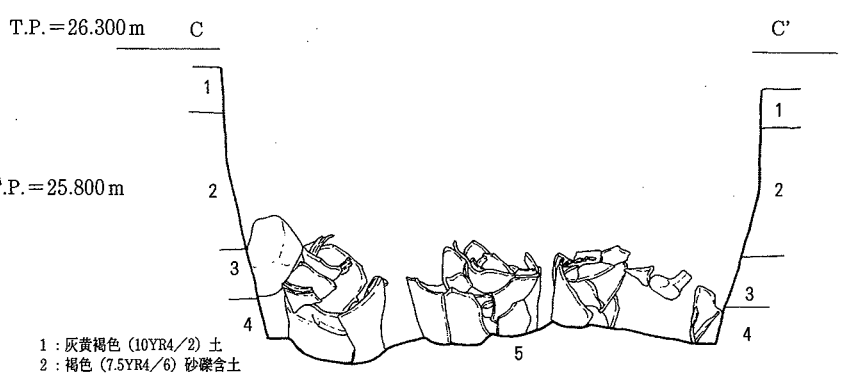


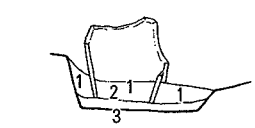


第２区断面図　S＝1/80

第３区
1：灰黄褐色（10YR4／2）土
2：明褐色（7.5YR5／6）シルトににぶい赤褐色（5YR4／4）シルトブロック、褐色（7.5YR4／3）シルトブロックの混在土
3：にぶい黄褐色（10YR5／4）砂礫混粘質シルト
4：褐色（10YR4／4）砂礫混土
5：明褐色（7.5YR5／8）砂礫混土
6：赤褐色（5YR5／6）　2～3cm大の砂礫混シルト
7：赤褐色（5YR4／6）砂礫
8：明赤褐色（5YR5／8）粘質シルト（墳丘土、葺石の下層は不明）
9：明褐色（7.5YR5／8）1～5cm大の砂礫混粘質土
10：橙色（7.5YR6／8）粘質土
11：明褐色（7.5YR5／8）砂質土
12：黄褐色（10YR5／8）粘質シルト
13：にぶい黄褐色（10YR5／3）砂礫混シルト　上層及び層中に15～25cm大の石を入れる
14：橙色（7.5YR6／8）砂礫混土
15：褐色（7.5YR4／6）シルト
16：赤褐色（5YR4／6）0.5～1.5cm大の砂礫含粘質シルト







埴輪２　断面図　S＝1/20

1：赤褐色（5YR4／6）粘質シルト
2：赤褐色（5YR5／6）砂礫混粘質シルト
3：明赤褐色（5YR5／8）粘質シルト

1：灰黄褐色（10YR4／2）土
2：褐色（7.5YR4／6）砂礫含土
3：赤褐色（5YR4／6）砂礫
4：明赤褐色（5YR5／8）粘質シルト
5：赤褐色（5YR4／6）0.5～1.5cm大の砂礫混粘質シルト

埴輪列平・側面図　S＝1/20

図24　第３区断面図　埴輪列・葺石検出状況

約30°である。南端では若干傾斜が緩くなるので、2段目のテラス部分に近いと考えられる。

3．出土遺物（図25）

本調査で出土した遺物は近世以降の盛土内から出土した陶磁器、瓦器、瓦のほか古墳に伴う遺物として円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪を確認している。

陶磁器は肥前系磁器が多数を占め、18世紀後半～19世紀の年代を与えられるものである。また、出土した瓦の中には中世以前に遡るものもあり、近接する地蔵堂廃寺に伴うものの可能性が高い。

円筒埴輪は埴輪列に伴う4基と盛土内から出土したものがある。盛土内から出土したものはほとんどが破片で、復元できるものは無い。埴輪列に伴うものは基底部と1段目の突帯まで設置された状態で検出し、東側より埴輪1～4の名称を与えた。一段目突帯より上部の破片については内部詳細調査のため、番号を付して調査時に取り上げた。埴輪はいずれも基底部より2段目の突帯付近まで破片が残存している。それより上段については残存しておらず、2段目突帯付近より1段目突帯まで漸次円筒内部に落ち込み、最終的に1段目突帯まで残った状態で埋没している。以下基底部まで復元可能である円筒埴輪2と3について詳述する。

円筒埴輪2は基底部径約28cm、1段目突帯から2段目突帯付近の復元径約30cmを測り、ほぼ直立して立ち上がる形態に復元できる。器厚は基底部1.25～1.9cm、一段目突帯付近1～1.2cm、2段目突帯付近0.8～0.9cmを測る。外面調整は一次調整がタテハケである。二次調整はヨコハケの痕跡が確認される。ヨコハケは盛土内から出土した円筒埴輪などの調整を考慮すると長さ27cm以上のストロークの長いものと推定できる。内面調整はナデで、先行してタテハケもしくはナナメハケを施している。ハケメは外面のものより細かい。ナデは粗く粘土紐接合痕が残る。粘土紐痕の厚みは約2cmを測る。突帯は方形を呈し、高さ1～1.2cmを測る。上辺は強いナデ

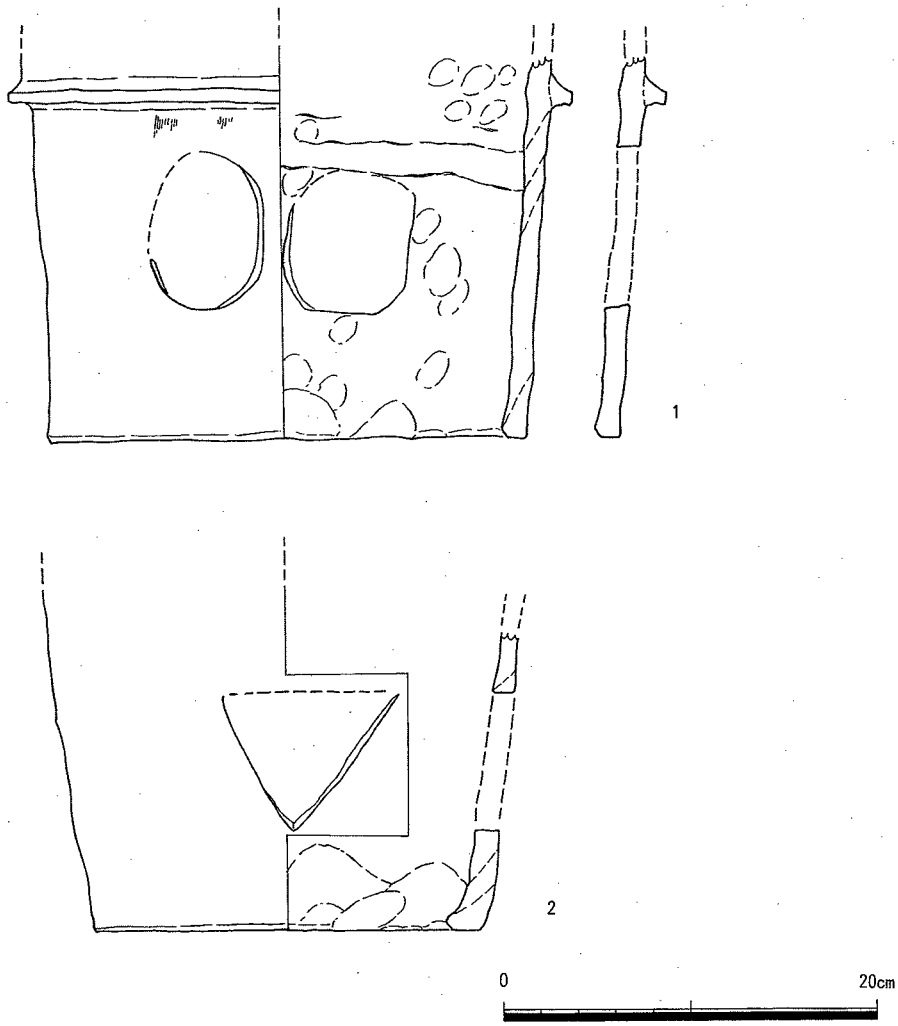


図25　出土埴輪2・3

のため下方に弯曲する。ナデ付けは粗く、突帯貼り付け面が露呈している。

円筒埴輪３は基底部径約20cm、１段目突帯から２段目突帯付近の復元径約25cmを測り、上方にやや開いて立ち上がる形態に復元できる。器厚は基底部1.25～1.9cm、一段目突帯付近１～1.2cm、２段目突帯付近0.8～0.9cmを測る。外面調整は一次調整がタテハケである。二次調整はヨコハケで、長さ27cm以上のストロークの長いものと推定できる。内面調整は非常に丁寧なナデを施し、粘土紐痕跡等は消されている。わずかに先行して施されたタテハケもしくはナナメハケの痕跡が残る。ハケメは外面のものより細かい。突帯は方形を呈し、高さ１～1.2cmを測る。上辺は強いナデのため下方に湾曲する。ナデ付けは粗く、突帯貼り付け面が露呈している。

４．まとめ

今回の調査は古墳外周の民間地境界部分に管理用フェンスを設置するための狭小な調査ではあったが、多くの成果を得ることができた。本調査をもって平成12年度から実施した整備事業は終了するため、全体の調査における一応のまとめを行いたい。

まず平成12～13年度に実施した古墳南側の調査では、近世～近代の石垣設置及び改修による撹乱を受け、築造当初の墳丘面がほとんど残存していない。平成13年度第２区において、上面を削平された状況ではあるが、第１段目テラスの痕跡と葺石崩落状況を確認した。崩落した葺石下から瓦質土器が出土していることから、この改変が行われたのは天正13年に豊臣秀吉が本陣を築いた際である可能性が高い。

今年度実施した古墳北側の調査では、南側と同じく近世～近代の改変で築造当時の墳丘面がほとんど残存していなかった。また、古墳東側では昭和26年の土砂採取時の復旧土を確認した。この復旧土は平成13年度第１区、今年度第１区において確認し、当時の土砂採取範囲は記録にあるよりも広範囲で、後円部の東半部近くまで及ぶものであった。

今年度調査第３区では第１段目のテラス面及び埴輪列、第２段目の葺石を確認し、最も大きな成果となった。埴輪列の埴輪形態及び調整等により本古墳は古墳時代前期末に築造されたものであることが判明した。

１段目テラスは現墳丘端部から約3.5mの部分で始まり、テラス長は約1.6～1.7mを測る。高さは地山検出面よりテラスまでが約１mを測り、テラスから斜面部までの高さは約0.3m上昇する。これらの数値から墳丘は３段築成と仮定すると、現古墳範囲とおおよそ合致する。このことから丸山古墳は３段築成である可能性が高い。また斜面部には葺石を配していた。

出土した円筒埴輪については全体を復元できるものが無く、整理途中であるため、詳細な報告は後日に行いたい。今回報告した円筒埴輪２と３については、円筒埴輪２よりも円筒埴輪３の方が径が小さく、スカシの形状も異なっている。また、調整方法についても埴輪２は内面のナデ付けが粗く、粘土紐痕を残すのに対し、埴輪３は丁寧なナデを施す等、異なる形状の埴輪が隣接して設置されている。この二つの埴輪の差異は工人の差を表すのか、器種の差によるものか不明である。観察では円筒埴輪３に比べ、円筒埴輪２の調整やスカシの穿孔方法は非常に稚拙なものであり、現状では工人の差を考えたい。また、窯等の存在を確認できないため、埴輪の供給についても、現状では不明と言わざるを得ない。

今回の調査により本古墳は古墳時代前期末築造の前方後円墳であることが判明した。同時代には岸和田市摩湯山古墳が築造され、貝吹山古墳群、風吹山古墳群へと継続する。また百舌鳥古墳群では乳の岡古墳が築造され、大王墓群域への始まりを迎える。このような周辺地域の状況のなかで、丸山古墳に葬られていた人物が泉南地域の主力豪族の一翼を担っていたことは確実で、今後は周辺地域の古墳や南側に築かれた５世紀代の円墳、方墳との関係等を明らかにして、丸山古墳の位置づけを行う必要がある。今後の課題としたい。

今回の調査によって、丸山古墳を含めた地蔵堂古墳群が市域の歴史を考える上で重要であることが判明した。この調査を機に今後の保護活用についても課題として取り組む必要があるだろう。（上野）

最後に、調査にあたっては下記の方々にご教示を得た。記して感謝いたします（敬称略）。

大阪府教育委員会　高島徹、藤沢真依、芝野圭之助、三宅正浩、宮野淳一、小浜　成、大阪府文化財センター　入江正則、江浦　洋、堺市教育委員会　石田　修、白神典之、近藤康司、十河良和、藤井寺教育委員会　上田陸

報　告　書　抄　録

ふりがな	かいづかしいせきぐんはっくつちょうさがいよう
書名	貝塚市遺跡群発掘調査概要
副書名	
巻次	25
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第64集
編著者名	三浦　基、上野　裕子、木嶋　崇晴
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中1－17－1　TEL 0724（23）2151
発行年月日	西暦2003年3月31日

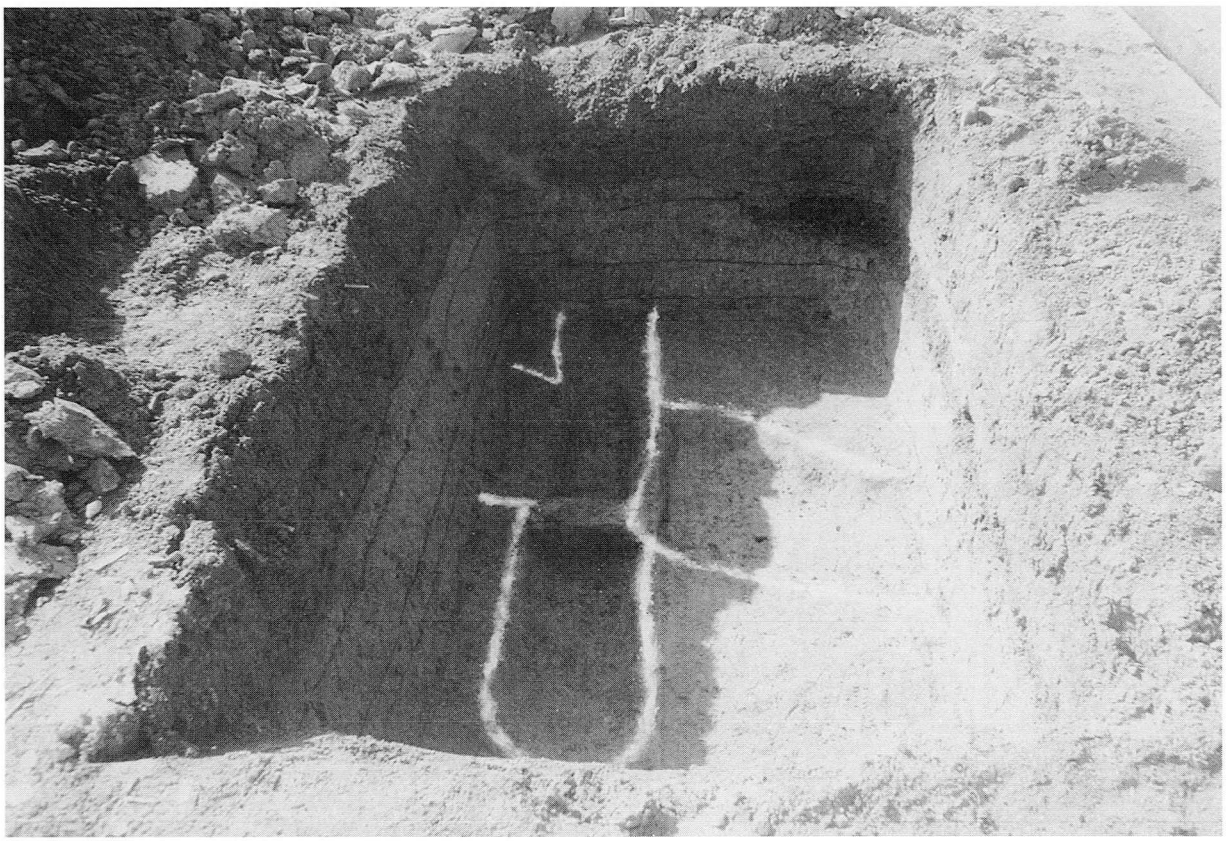
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
わきはまいせき 脇浜遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 わきはま 脇浜	27208	66	34度 26分	135度 21分	2002 0322～23	0.88	個人住宅
わきはまいせき 脇浜遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 わきはま 脇浜	27208	66	34度 26分	135度 21分	2002 0913～14	8	個人住宅
さわじょうあと 沢城跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 さわ 沢	27208	28	34度 26分	135度 21分	2002 0521～22	7.5	個人住宅
さわじょうあと 沢城跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 さわ 沢	27208	28	34度 26分	135度 21分	2002 0722～23	6	個人住宅
いっさいいせき 石才遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 とば 鳥羽	27208	59	34度 26分	135度 22分	2002 0812～13	6	個人住宅
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 じぞうどう 地蔵堂	27208	72	34度 25分	135度 21分	2002 0424～25	12	個人住宅
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 じぞうどう 地蔵堂	27208	72	34度 25分	135度 21分	2002 0903～04	11.42	個人住宅
せちごいせき 清児遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 あそなか 麻生中	27208	36	34度 25分	135度 21分	2002 0531～0601	5	個人住宅
なごせいせき 名越遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 なごせ 名越	27208	71	34度 25分	135度 23分	2002 0311～12	6.9	個人住宅
みつまつきたがいといせき 三ツ松北垣外遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 みつまつ 三ツ松	27208	84	34度 23分	135度 22分	2002 0719～20	10.8	個人住宅
こつみいせき 木積遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 こつみ 木積	27208	74	34度 22分	135度 23分	2002 0912～0913	4.05	個人住宅
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 こつみ 木積	27208	18	34度 22分	135度 23分	2002 0218～19	4.5	個人住宅
にいのいけいせき 新井ノ池遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 あそなか 麻生中	27208	30	34度 26分	135度 22分	2002 1205～06	6.65	個人住宅
はんだいせき 半田遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 あそなか 麻生中	27208	31	34度 26分	135度 23分	2002 1218～19	9.75	個人住宅
かじこうざき 加治・神前・ はたけなかいせき 畠中遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 かしん 加神	27208	23	34度 26分	135度 21分	2002 0122～23	8.25	個人住宅
かじこうざき 加治・神前・ はたけなかいせき 畠中遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 かしん 加神	27208	23	34度 26分	135度 21分	2002 0313～14	5.4	個人住宅
かじこうざき 加治・神前・ はたけなかいせき 畠中遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 かしん 加神	27208	23	34度 26分	135度 21分	2002 0416～17	8	個人住宅
かじこうざき 加治・神前・ はたけなかいせき 畠中遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 いっさい 石才	27208	23	34度 26分	135度 21分	2002 0704～05	7.59	個人住宅

加治・神前・畠中遺跡	大阪府貝塚市畠中	27208	23	34度26分	135度21分	2002 0704～05	6.2	個人住宅
加治・神前・畠中遺跡	大阪府貝塚市加神	27208	23	34度26分	135度21分	2002 0711～0718	285	共同住宅
小瀬五所山遺跡	大阪府貝塚市小瀬	27208	58	34度26分	135度22分	2002 0917～1004	450	宅地造成
地蔵堂丸山古墳	大阪府貝塚市地蔵堂	27208	7	34度25分	135度21分	2002 1101～1129	25.2	管理用フェンス

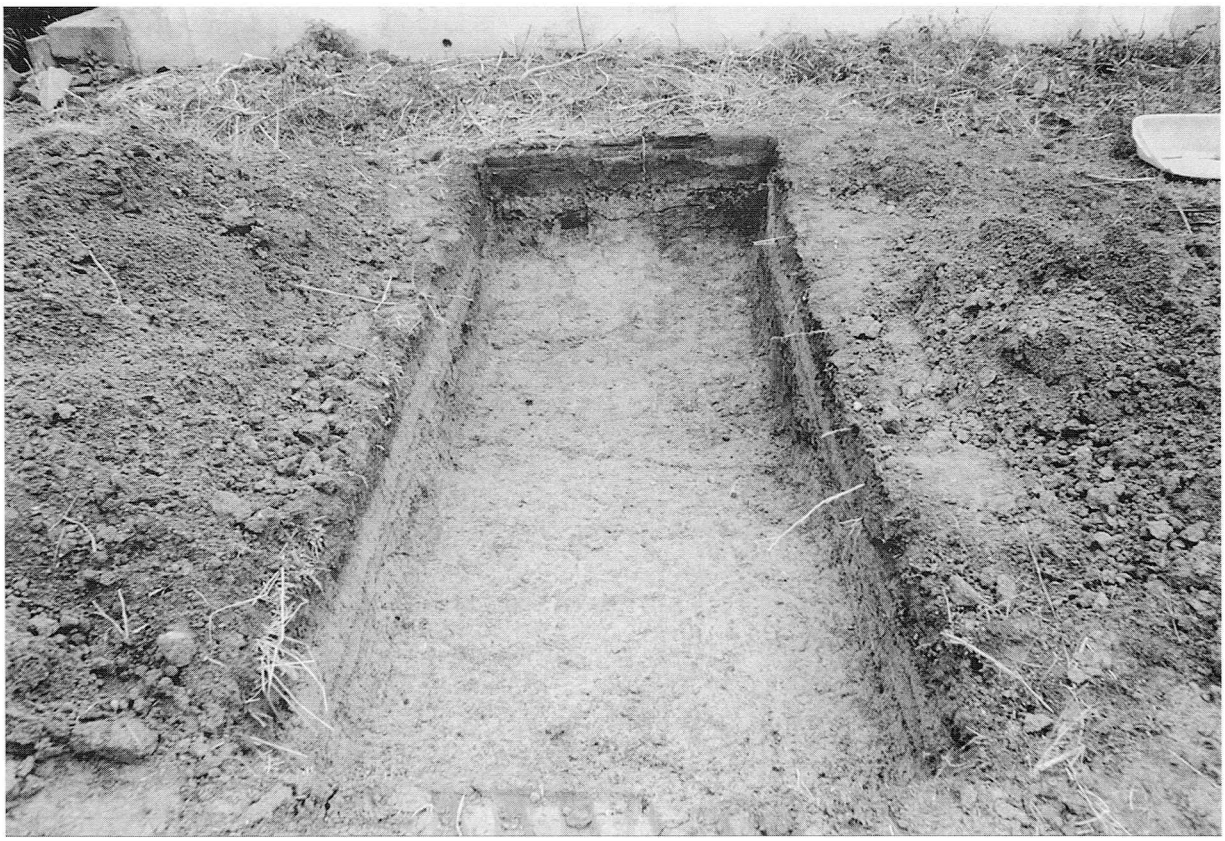
所収遺跡名（ふりがな）	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
脇浜遺跡	生産遺跡 散布地			土師器、瓦器	
脇浜遺跡	生産遺跡 散布地	近代		石臼	
沢城跡	城跡、集落跡	中世	鋤溝 落込み遺構	土師器、瓦器	
沢城跡	城跡、集落跡	近世、近代	溝	陶磁器	
石才遺跡	散布地	近世、近代	落込み遺構	陶磁器	
地蔵堂遺跡	古墳、集落跡 社寺跡	近世	土坑	瓦	
地蔵堂遺跡	古墳、集落跡 社寺跡	近世以降	井戸	瓦、陶磁器	
清児遺跡	散布地	近世			
名越遺跡	散布地		流路		
三ツ松北垣外遺跡	集落跡	中世		土師器	
木積遺跡	散布地	中世		土師器、瓦器	
木積観音寺跡	寺院跡 集落跡	中世、近世			
新井ノ池遺跡	集落跡	弥生時代、古墳時代、中世	溝	土師器、瓦器	
半田遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	溝	土師器、須恵器	
加治・神前・畠中遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	大溝	土師器	
加治・神前・畠中遺跡	集落跡				
加治・神前・畠中遺跡	集落跡				
加治・神前・畠中遺跡	集落跡	中世、近世			
加治・神前・畠中遺跡	集落跡	中世	溝、鋤溝、柱穴	瓦器、瓦	
加治・神前・畠中遺跡	集落跡	中世	溝、鋤溝 落込み遺構	土師器、瓦器、須恵器 青磁	
小瀬五所山遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物跡 溝、土坑	土師器、須恵器	
地蔵堂丸山古墳	前方後円墳	古墳時代	古墳	埴輪、土師器、須恵器	

図　　版

図版1　新井ノ池遺跡（2002－47区）・半田遺跡（2002－49区）



1．2002－47区　調査区1　SD－2、SD－3　（南西より）



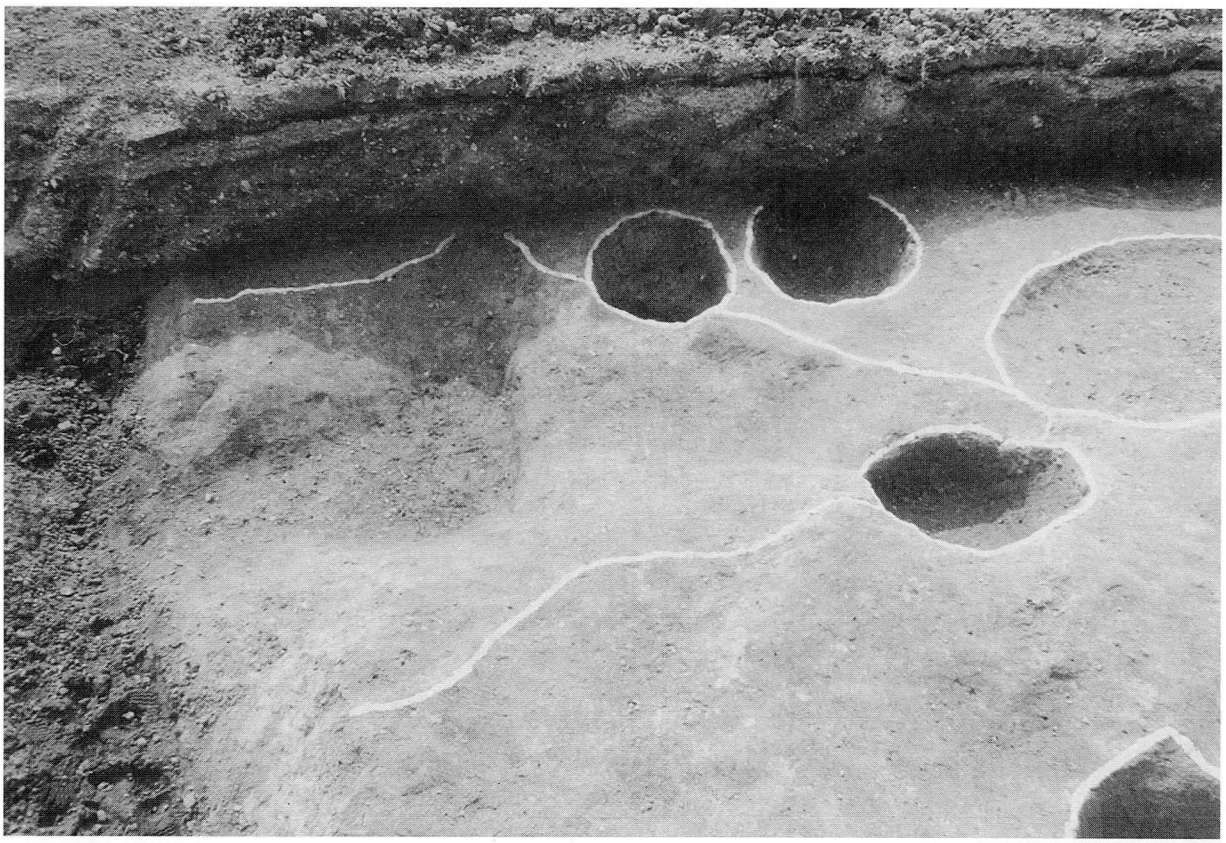
2．2002－49区　調査区2　SD－2　（北より）

図版2　加治・神前・畠中遺跡（2002－17区）

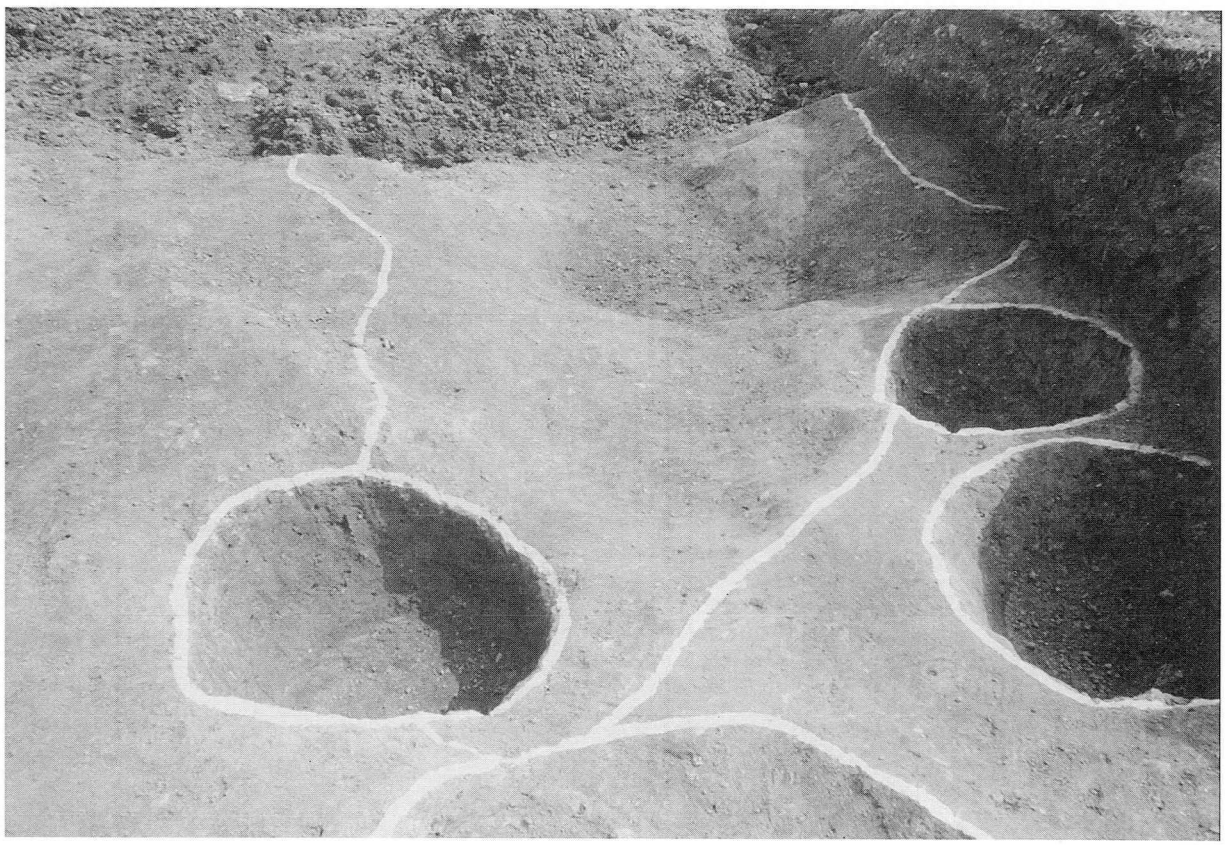
1．2002－17区　調査区1　遺構完掘状況　（北東より）

2．2002－17区　調査区2　遺構完堀状況　（北東より）

図版3　小瀬五所山遺跡（2002－34区）

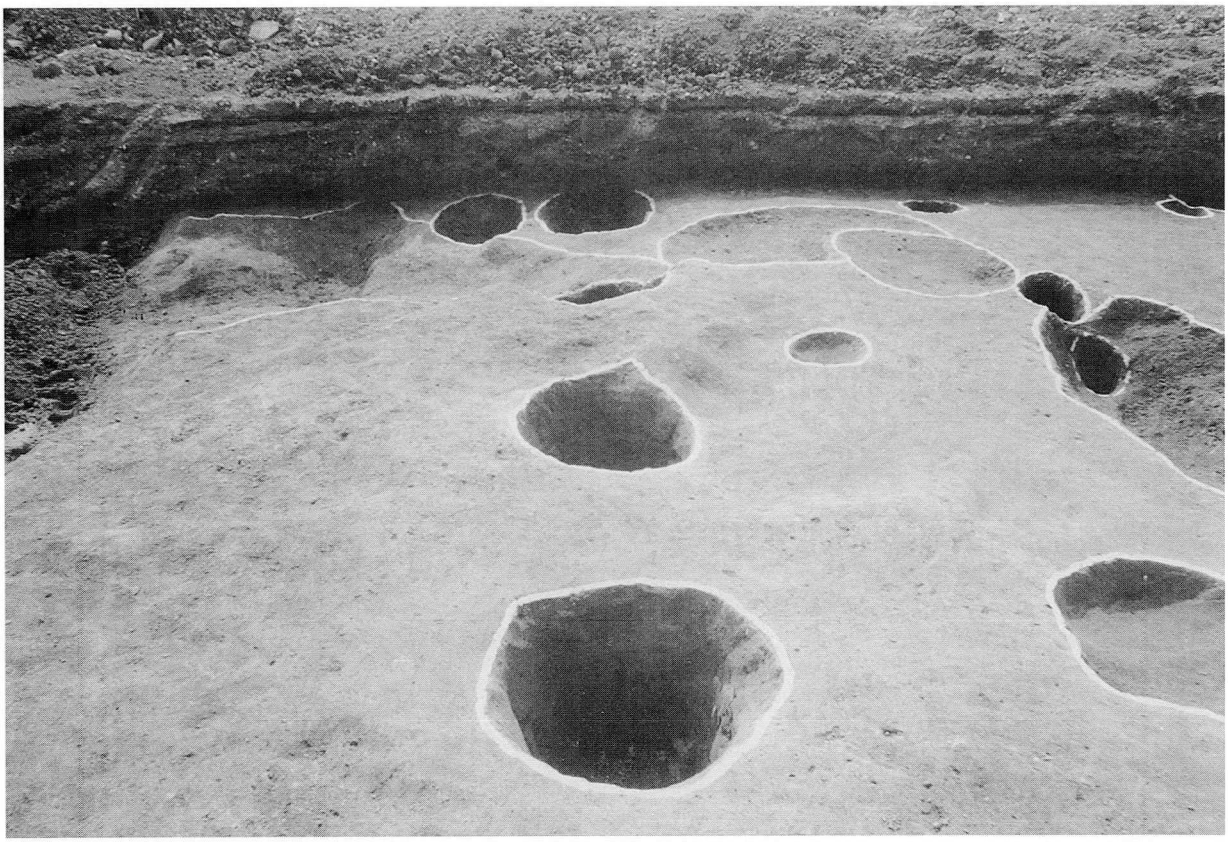


1．2002－34区　SD－204　（北東より）



2．2002－34区　SD－204　（北西より）

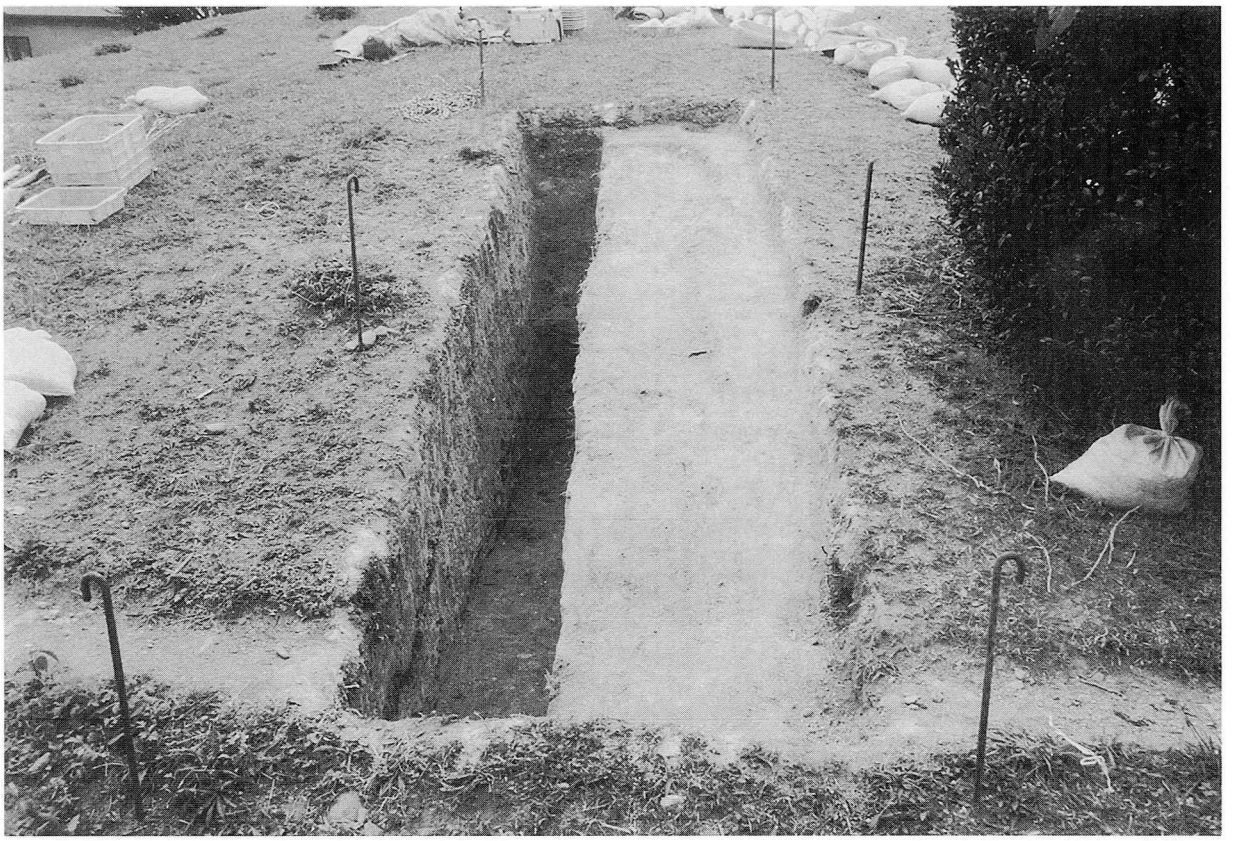
図版4　小瀬五所山遺跡（2002－34区）



1．2002－34区　建物Ａ柱穴（Pit－203・207・209・210）　（北東より）

2．2002－34区　建物Ａ柱穴（Pit－213・214・215・218）　（北東より）

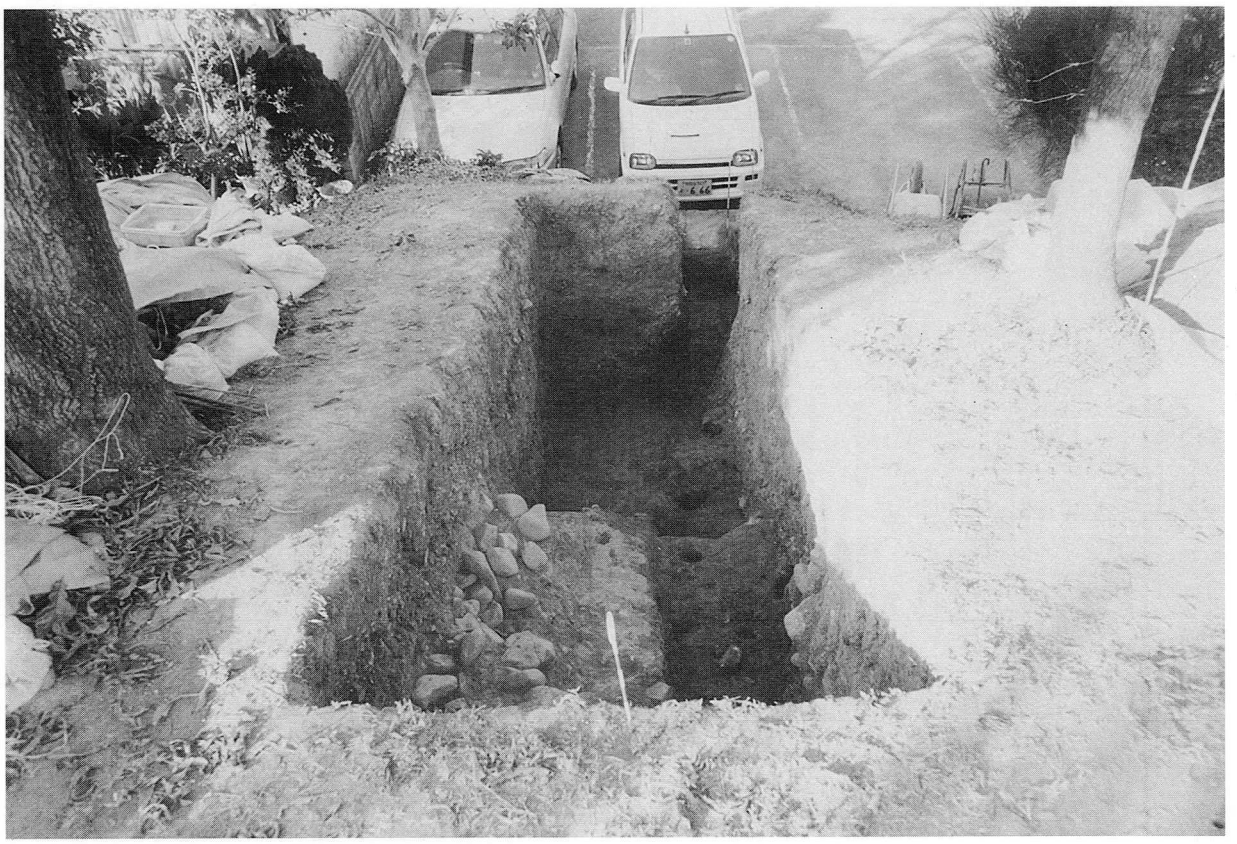
図版5　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）



1．2002－41区　第1区検出状況　（北より）

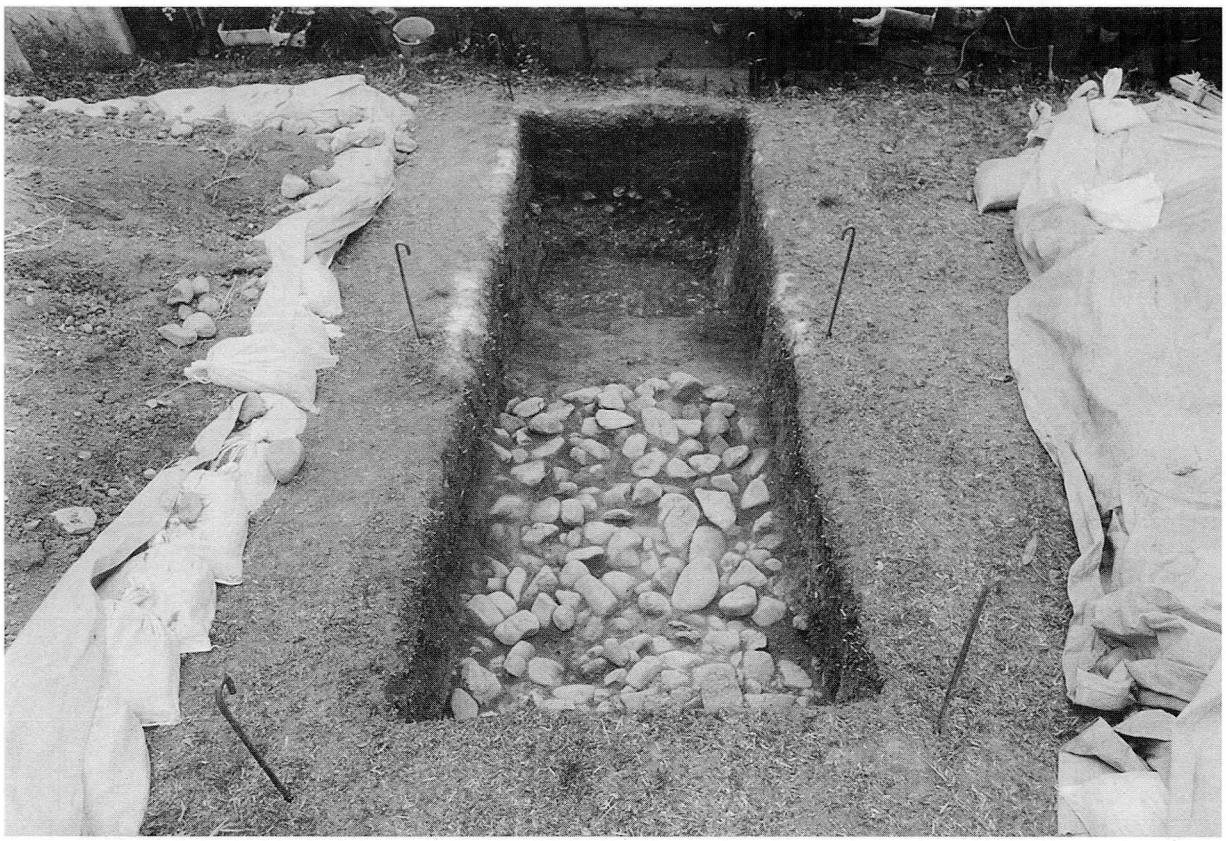
2．2002－41区　第1区断面　（南西より）

図版6　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）



1．2002－41区　第2区検出状況　（南より）

2．2002－41区　第2区断面　（南西より）



1．2002－41区　第３区　近世以降の石群検出状況　（南より）

2．2002－41区　第３区　近世以降の石群検出状況　（北より）

図版8　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）

1．2002－41区　第3区検出状況　（北より）

2．2002－41区　第3区検出状況　（南より）

1．2002－41区　第３区　埴輪列検出状況　（南より）

2．2002－41区　第３区　埴輪列検出状況　（南より）

図版10　地蔵堂丸山古墳（2002－41区）

1．2002－41区　第３区葺石検出状況　（北より）

2．2002－41区　第３区断面　（南東より）

貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第64集

貝塚市遺跡群発掘調査概要 25

発　行　日　　平成15(2003)年３月31日

編集・発行　　貝塚市教育委員会
〒597-8585 大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号
TEL 0724－33－7126

印　　刷　　㈲山村印刷所
貝塚市近木1483－8